演劇映画綜合雑誌

道頓堀

第拾四年　六月喜劇特輯

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十四年六月十日印刷（毎月一回）
昭和十四年六月十五日發行（十五日發行）
「道頓堀」第十四年第百五十一號

第百五拾壹號

ドーコレクチイテ

詩・古谷玲兒
曲・杉原泰藏

明朗流行歌

青春一路

櫻井健二

若人の胸に捧ぐ
生々しい青春の
讃歌！美しい詩
と愉しい曲を！

片面
春宵夜曲
服部富子
レコード番號
A—〇〇三

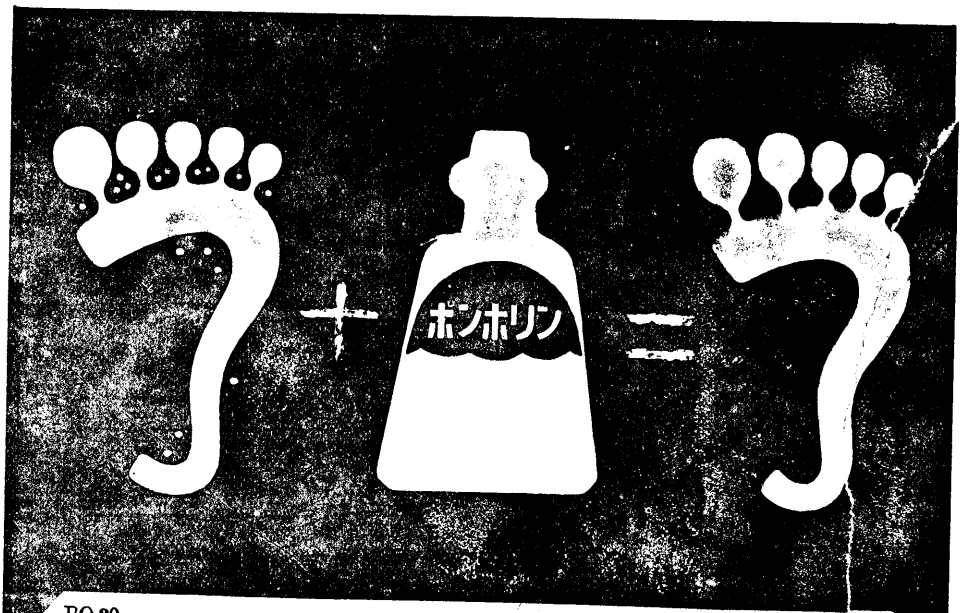
流行歌
ほめて下さい
美ちゝ奴
片面 留守部隊 小野巡

流行歌
あの町この町
デイツク・ミネ
片面 雨のセレナーデ デイツク・ミネ

映畫物語
清水港
伍東宏郎

名曲物語
人生の並木路
泉詩郎

日活・主題浪曲
清水港
前篇 風來坊政吉
後篇 鐵火の戀
廣澤虎造



PO 30

水むしに

液剤

ポンホリン

病原菌の本據を衝け！

水虫の病原菌（白癬菌）は、恰もトーチカに潜伏する敵軍の如く、常に掌や蹠（あしのうら）の組織内に頑強に巣喰つてゐるのですから、これを殲滅するには**ポンホリン**の如き、強力な殺菌力と、その殺菌力を深部まで充分に作用させる滲透力を具へた専門藥を用ひ、一擧、其の本據を衝くのが治療の捷徑です……

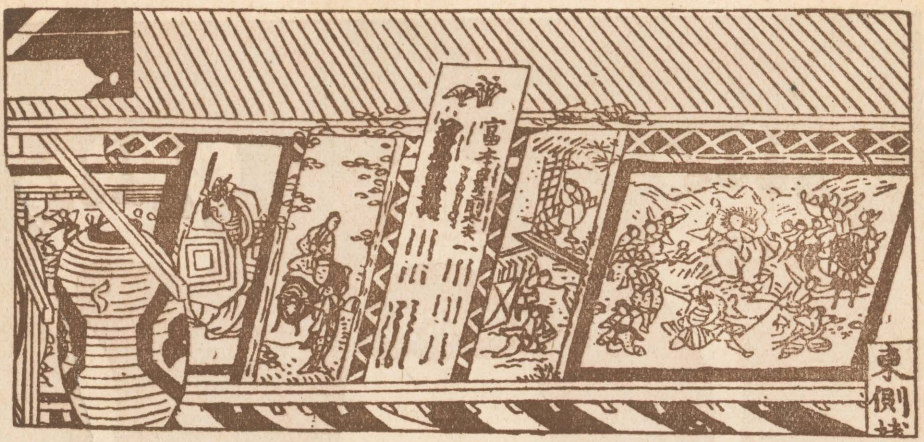
用法は一日一回

綿か筆先に**ポンホリン**を含ませて患部に塗布するだけ、たゞそれだけで充分です。

作用が強いから絶對に一日二回以上用ひる必要はありません

定價
.40セン
.60セン
1.50セン

發賣元　大阪・東京　株式會社　塩野義商店



目次

道頓堀　第百五十一號

◇喜劇特輯◇

◇五郎劇の特色……中井浩水（2）
◇家庭劇に寄せる私見……益田甫（3）
◇喜劇の價値と使命に就て……大久保佐陽子（4）
◇街の喜劇……楠本木念仁（6）
◇英雄と名優……曾我廼家五郎（8）
◇三つの惱み……曾我廼家大磯（10）
◇東京と大阪……曾我廼家小次郎（11）
◇大阪と東京の食べ物……志賀廼家淡海（12）

◇五郎劇に注文したい事ども……（14）
◇家庭劇に注文したい事ども

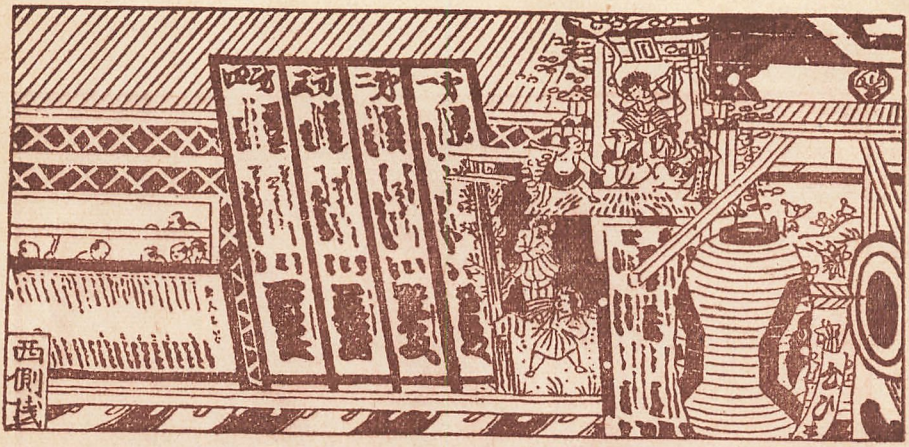
◎諸の名回家答◎（上載順不同）
▽高安月郊▽額田六福▽水谷幻花▽坂本猿冠者▽本山荻舟▽中井駿二▽長谷川伸▽川尻清潭▽鎌谷慶二▽中井浩水▽淺野武男▽菱田正男▽稻垣林之助▽酒井七馬▽高谷伸▽吉本寛汀▽丸山耕▽永田衛吉▽八木善一▽野田宗二▽入江來布

◇五郎の素描……酸甘郎（26）
◇ポケット日記抄……澁谷天外（20）
◇メモニ代えて……西尾福三郎（21）

◇前進座を見て……升屋治三郎（39）
◇新國劇を觀る……菱田正男（40）

◇喜劇俳優になつた動機と笑はすこつ……（22）
▽曾我廼家十次郎▽曾我廼家二三蝶▽曾我廼家林蝶▽曾我廼家文童▽曾我廼家十福▽曾我廼家明蝶▽曾我廼家壽美蝶▽曾我廼家勢蝶▽曾我廼家五郎丸▽曾我廼家天照▽曾我廼家泉虎（順不同）

◇神戸松竹劇場狂言解説……森ほのほ（32）
□市川左團次一座　申村魁車特別出演□



◈京都南座狂言解説……森　ほのほ（34）
□中村會・東西合同大歌舞伎□
◈與へられたる……食満南北（31）
◈半歳の回顧……篠山吟葉（36）
◈二條城の清正の初演……川尻清潭（42）
◈近世上方名優傳◈
中村宗十郎（二）……高谷伸（55）
◈映畫界放談……玉木潤一郎（60）
▼映畫紹介▲
踊るホノルル……カトラ社提供（64）
胸に咲く花……松竹大船作品（65）
江戸ッ子大繁昌……松竹京都作品（66）
海棠の歌……新興東京作品（51）
◈芝居の裏と表を語る座談會……（46）
大川澱江、食満南北、鷲谷武、杵屋正一郎、篠山吟葉、田中耳郎、鳥江鐵也の諸氏
カラーセキション……大阪漫畫グルッペ七馬・たもつ・彦・（27）
▽劇壇往來（19）　道頓堀だより（45）　▽五月のアルバム（68）　▽あきれたボーイズ（68）
▽扉・曾我の川柳（1）　□後記……（70）

★口繪★

⊙歌舞伎座・曾我廼家五郎劇▽曾我祭・五郎時致五郎▽鴨川千鳥・女房お久五郎▽曾我祭舞臺面▽エプロン舞臺面▽故郷の土舞臺面▽故郷の土・古川正作五郎▽⊙中座・家庭劇▽大陸の花嫁舞臺面▽拾ふた弗人形一撃舞臺面▽⊙神戸松竹劇場▽⊙西山物語▽太左團次▽色彩間苅豆・かさね魁車⊙文樂座人形浄瑠璃・彦助櫓現誓助劍▽⊙京都南座▽二條城の清正・清正吉右衛門▽汐くみ・海女福助▽道行初音旅・靜御前梅玉▽⊙新興演藝部披露▽興行角座▽一郎・ワカナ▽あきれたボーイズ⊙五月の芝居▽角座・女教室・⊙蠟山操大路▽新國劇（歌舞伎座）越後獅子祭・片貝の半四郎　辰巳▽齋藤大使・齋藤大使　島田⊙前進座（中座）若き啄木・啄木　甄右衛門⊙浪花座▽阪東要二郎　伏見澄子

銘酒
白雪
摂津伊丹灘
小西酒造株式會社

五郎劇

•曾我祭•

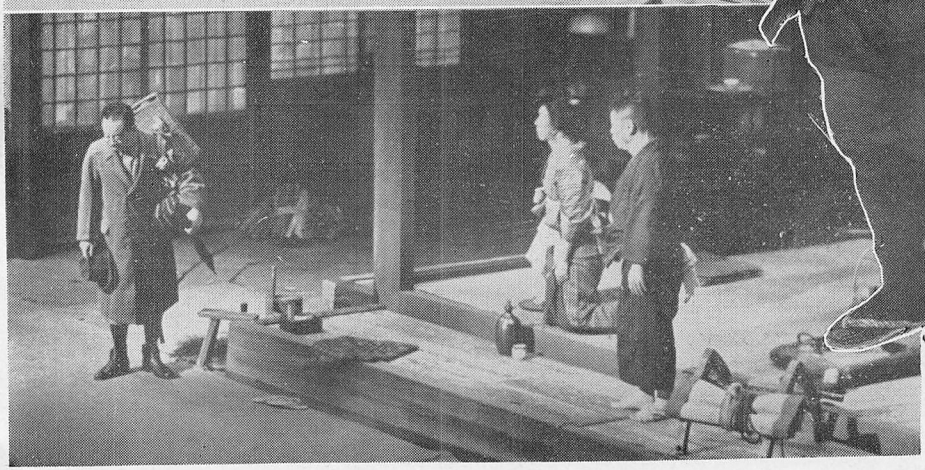
曾我五郎時致	五郎
熊吉女房お久	五郎

•鴨川千鳥•

座歌舞伎 大阪 六月

「會戎祭」舞臺面

「ニグロン」舞臺面



「故郷の土」舞臺面

「故郷の土」國古川正作・五郎・

五郎劇

腹の底から笑へるお芝居！一家揃つて愉快に御覽願へる五郎劇！明日の勤勞に備へて是非今夕はお運び下さいませ！

曾我祭記念興行◇毎夕五時開演

☆御觀劇料☆

櫻席 五十錢
菊席 一八十錢
一三三等
二等
三一円五十錢

（他二入場税一割）

前賣切符◇一等指定席券に限り五日前から・二等席券は櫻席前日に發賣致します◇團体觀劇◇御得意様御招待、町内會など の會合に是非當座を御利用下さい。

◇一幕券は毎開幕前に發賣致して居ります

専電 ☎二八二六—二八二八

日曜日四十日・日八十
マチネ一十日・日午正
一・日開演

1 手品の種
2 バケツの水
3 三つの世相
4 隣り合せ

冷房完備

火版 歌舞伎座

満員御禮

1 生めよ殖せよ

赤ちやんは國の寶、大切に育てませう——最近ちの朝日新聞の記事を生やれたよ拜借して赤ちやんほ初舞台に笑ひこんなつて下さい。こそ將に國家喜劇！

場

2 エプロン

外國製のクリーニング、染め直し、けもせず、手製でもか上げた綻可一枚中心で五郎おロンけ公園散歩夫はじめ見かまりをけて一の座が熱演……。

場

3 紀念 曾我祭

おこがましくも——笑ひ芝居名の藝名に勝手にの名づけた勿体なさ、今月七百五十年目宵しみ畏みて曾我祭に拍手打つ組立記仕念狂言に組我祭、組紋記念に候。

五景

4 故郷の土

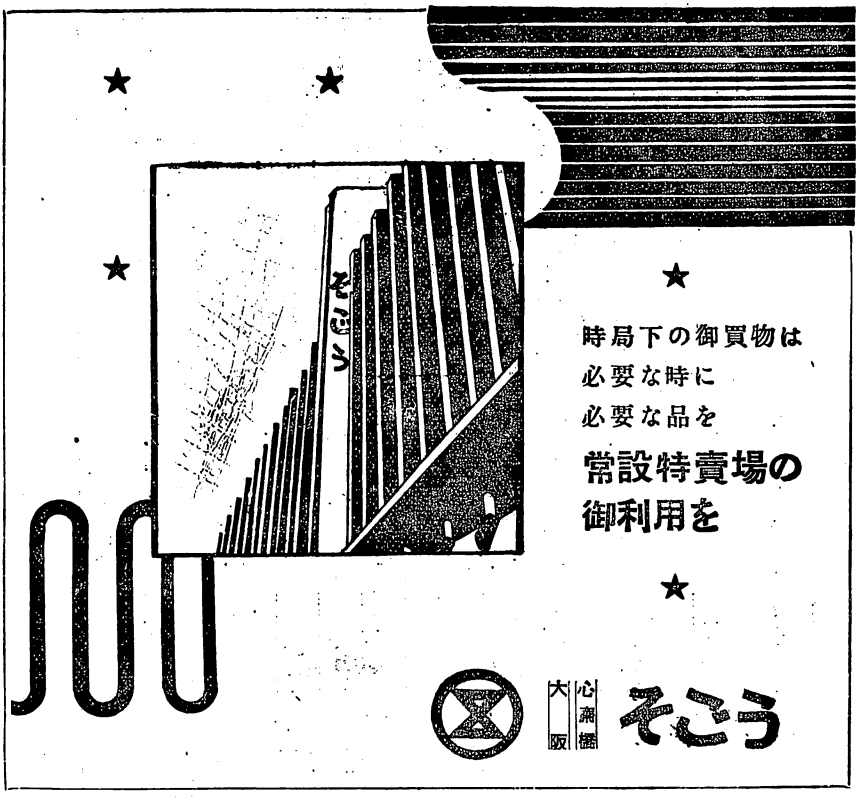
富——貧——涙と笑ひ——こんなすみ文字混司して作りもなるが一杯のカテイザ御笑味御眼にかけます。

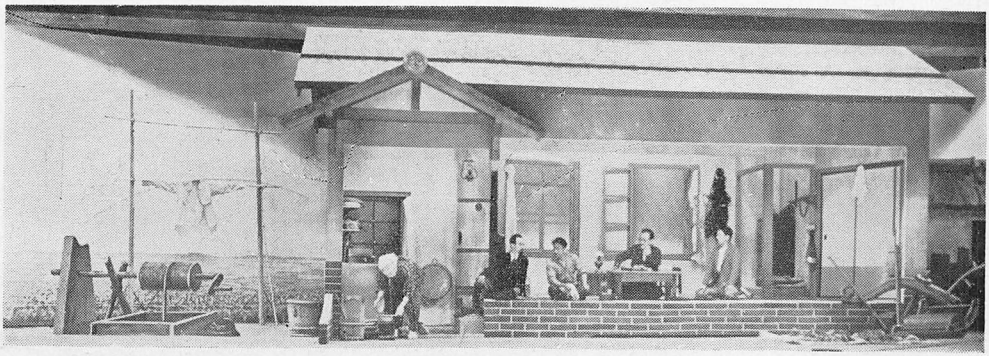
一場

5 鴨川千鳥

外の女にモヤモヤ悔騒がれたもめる？何處の氣女にの喜劇、主人公でどんござる事件が……。

二場


そごう
時局下の御買物は
必要な時に
必要な品を
常設特賣場の
御利用を
大阪
心斎橋
そごう



「大陸の花嫁」舞臺面

右から　森一・織小・田高・元安・宮村一

家庭劇

「拾ふた弗入」舞臺面

六月

中座

★最後の一撃★

社員　堀尾彌一・天外

仲居　石河・くき

社員　中西貞吉・十吾

中村會

南座

六月 京都

「汐くみ」

海女　刈藻　•福助•

「二條城の清正」

清　正　•吉右衛門•

靜御前　•梅玉•

旅　音　初　行　道

あ　き　れ　た　ボ　ー　イ　ズ

一　郎　•ワカナ

—新興演藝部披露興行•角座—

紫式部の清純な貞節と烈々たる文學熱を綴る未曾有の巨大篇

紫式部

脚本演出	・	野淵昶
撮影	・	川崎新太郎
時代考證	・	中村大三郎 伯爵

新興京都撮影所初夏超豪華巨篇

歌川絹枝
梅井蓉子
雲村重子
美國八重子
甲斐世津子
高松昌子
三保敦子
郡光子
香織不二子
小川操子
滋野井みさ子
水谷根子
大久保美子
高山京子
諏訪子
小林と子
英不和し子
日高二里子
梅子
浅香新八郎
市川男女之助
松本泰三郎
南部章三郎
光岡龍輔
水田浩三郎
高野篤郎
長岡正太郎
菊池右衛門
嵐月俊太郎
大澄
鈴木

證券金融

有價證券賣買

株式會社

日本信託銀行

本店　大阪市東區今橋二丁目

支店　東京市日本橋區南茅場町

スセロプ
作製板看術美

るゆらあ
宣傳廣告

廣告商事社

造勝中田

大阪千日前

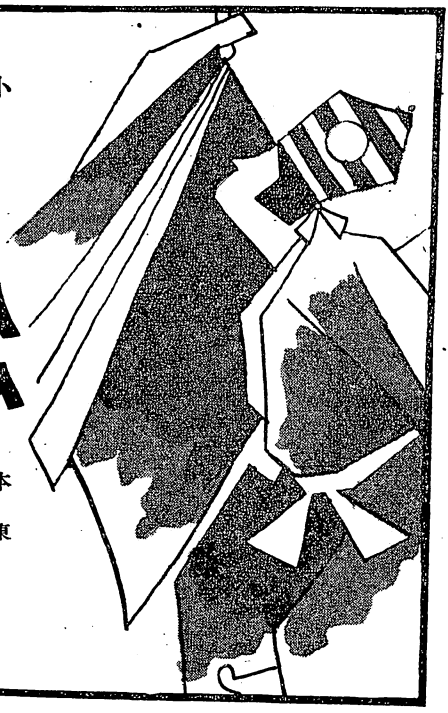
電戎三七九〇番
ルクナミ

裂小・具道小

裳衣貸

物催の會宴・會藝演人素
裳衣の禮婚・會習溫秋春

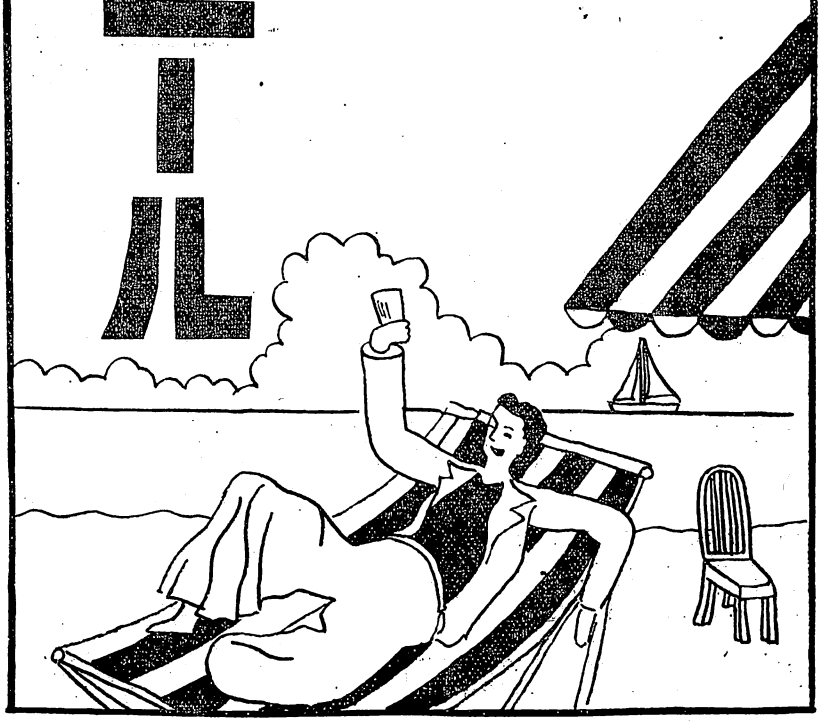
松竹衣裳部



内ルビ竹松町坂南區速浪市阪大　店本
番四三六五戎話電
四ノ二町形駒區草淺市京東　店支京東
番一六六六草淺話電

(いさ下用利御拘不に少多裳衣の般一他其
すま計取くよ利便じ應に談相御の客來御)

受けて
爽涼！
飲んで
潑剌！！
アサヒビール



•次團左• 太源邊渡
•車魁• ねさか

場劇竹松

六月 神戸

「豆苅間彩色」

「語物山西」

人形淨瑠璃「彦山權現誓助劍」　座樂文

★五月芝居の異色篇★

← 座角

「室教の女」

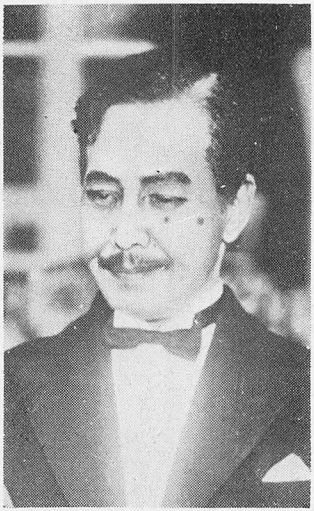
•路大• 操山蠟

•巳 辰• 郎四半の貝片

↑

← 祭子獅後越
使大藤齋

座伎舞歌



齋藤大使•島田•

中座

若き日の啄木

啄木 •瓢右衛門•

↓

子澄見伏•郎二要東阪

浪花座

中村芳子の七お

出演・作
平井正一郎

新企劃歌舞伎レヴュウ

おしちと吉三

關西歌舞伎若手花形連出演・松竹少女歌劇新進組出演
文樂座若手特別出演・長唄囃子連中管絃團伴奏

中村　芳子
實川延三郎
中村仲之助
市川九團次
嵐吉三郎

凄い人氣はあたりまへ！
日本一の豪華實演と大船
二大名画週間ですもの
明日曜はサアみんなで
斷然面白い大劇へいら
つしやい

實演時間表
第一回十一時卅五分ゑより
第二回三時卅五分ゑより
第三回七時卅五分より

斷然凄い日本一の番組

大船女優軍總出演の大作
新女性問答
前篇 愛憎篇
後篇 友愛篇
同時上映

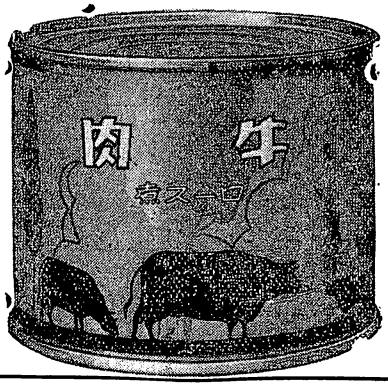
德大寺伸・春日英子の
新企劃歌舞伎レヴュウ
明日の踊り子
お七と吉三

明日の日曜日は
早朝興行
午前八時開場
九時開演まで
七〇錢
お子達 四〇セン
均一税共

大劇

金鶏印罐詰二大製品

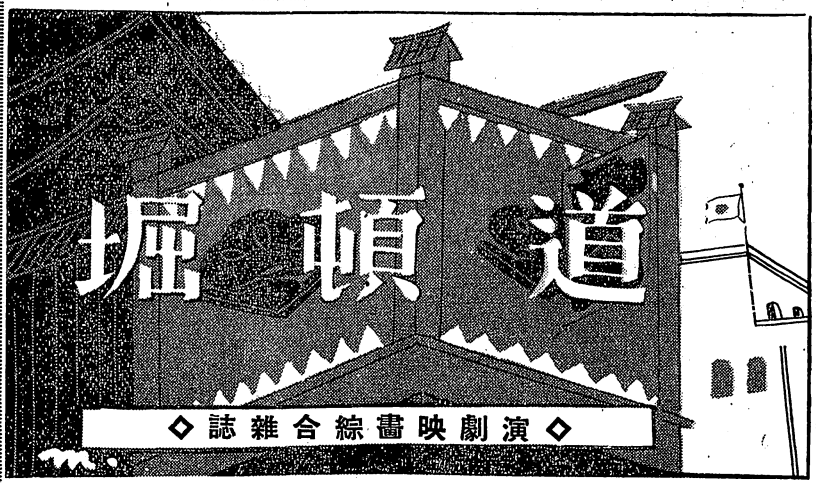
1. 純良精選の牛肉
   で御座います
1. 不意の御來客に
1. 御酒ビールの御友に
1. キャンピングに
1. ハイキングに
1. 各地百貨店
   著名食料品店
   に販賣致して居ります
1. キンケイ印を御指定下さい



洋酒・食料品・罐詰問屋

大阪市東區豊後町三番地

株式會社 横山商店



曾我の川柳

蝶千鳥富士の裾野をさして飛び

蝶々と千鳥と蟬がひさ合せ

蝶千鳥ッイ飛びさうな小袖なり

紋がさかさよと鎌倉の質屋いひ

貧乏も曾我ほどすれば名が高し

第百五十一號

喜劇特輯

五郎劇の特色

中井浩水

口を章魚のやうにして兩手を左右へ五指を開き、足を爪立てゝあるく……曾我廼家五郎がお婆さんやお爺さんに扮する時、常にこんな珍態を舞臺で見せる、見物がとても嬉れしがる、私も又ふと鼻をつまみながらつひ笑はせられる。私は嘗つて彼れの藝術をドリアンのやうだと書いたことがある、然し實のところ私はドリアンを喰つたことがないが聞く處によるとドリアンを卓上に置くと一室臭氣で鼻がもげさうであるといふ、けれどもその美味は云はん方なしとある。

たとへば大にしては蝶六、小にしては甲乙丙丁、五郎劇になくて叶はぬ人々のやうに思へたがさてその人々が一座から姿を消しても五郎劇は依然として聲價を一毫も損せず舞臺は相變らず面白い。こゝに五郎劇の眞面目があり、五郎のエライ處であると思ふ。

舞臺の統制、座員の習練、恐らく五郎劇ほどよく整つた一座はあるまい、五郎の專制、一黨の心服、これが今日を成してゐる。大阪に於ける五郎劇のお客は定まつてゐてそれだけに殖えもしないし減りもしないと言ふことを以前に耳にしてゐたが近頃は殖えて行つてゐるやうである、五郎の爲め五郎劇の爲めに私は同慶に堪えない。

よく、五郎に新脚本を與へよといふ聲を聞いたものである、しかし五郎劇はどこまでも五郎自作或は五郎手入れの脚本で終始させるがよろしい、理窟ではない事實だ。五郎といふ男はそんな男である。

かうした方が形が好いと云つて猫の髭を刈つたら猫は頗る

迷惑千萬である、仙人掌の姿をかう直してやらうと骨を折つたら仙人掌はイヤな顔をするだらう、五郎劇はあゝいつた脚本で通すが好い、もし世間が飽きたら、飽きたらで五郎劇の店を閉めるがよろしい、これに代る第二のものがまた現はれるだらう。

家庭劇に寄せる私見

益田甫

僕が曾我廼家の喜劇に心を寄せはじめたのは、かなり古い。震災前に亡くなつた十郎の一座が、毎年二三回宛、數寄屋橋にあつた有樂座に來たのを觀るやうになつてからである。その以前、五郎十郎が合同で新富座に來てゐた頃から、僕は屢々見に行つたのであるが、何故かその頃にはあまり心をひかれなかつたのである。十郎の死を聞いた時には、僕は蔭ながら隨分がつかりしたものである。

その後、僕は五郎劇によつてあの頃の感激を味はうと、屢々見物に行つたものだが、どうも僕にはピッタリ來ないので、所謂曾我廼家劇から遠ざかつてしまつたのだつた。

ところが四五年前、少女歌劇の仕事を賴まれて毎月下阪する機會を得てたま〳〵道頓堀で家庭劇を見物し、曾我廼家十吾の芝居を見た時、僕は思はず「おやッ?」と思つた。それは十吾が柄といひ、藝風といひ、死んだ十郎のまゝの感じを受けたからである。僕は十年前に振られた懷かしい戀人に、パッタリめぐり逢つたやうな感激を受けたものである。それ以來、十數年十郎が好きであつたと同じやうに、十吾の芝居が好きになつてしまつた。それが嵩じて、今日では時々家庭劇の爲に脚本を書くやうになつてしまつたのだ。

だが、僕は脚本を提供してゐ乍ら、常に一つの不滿を家庭劇の爲に持つてゐる。それは僕に限らず、座外から提供される脚本には十吾が殆ど顔を出さないで、石河薫を中心に、新派新劇出身の人々のみを活躍させてゐる事だ。十吾は專ら自作（茂林寺文福）乃至は館直志（天外）との合作脚本にのみ出演してゐるのは何故だらう?。

家庭劇が舊來の曾我廼家劇と目先を變へる爲に、新派新劇出身の多くの俳優を入れ、座外作家から脚本を求めてゐ

る事は賢明だ。だが、それが石河薫乃至他の新派新劇出の俳優だけを生かすのでは意味をなさない。僕自身としては、十吾自作の劇を自演するのを觀る事は嬉しい。然しそれは僕だけの趣味であつて、一般の觀客の趣味に投ずるかどうか。いや、今日はそれでいゝだらう。明日もそれでいゝかどうかを疑ふのだ。

曾我廼家劇のマンネリズムが鼻について來たといふ聲はかなり前から五郎劇に對して聞く評言である。十吾劇もどうやらマンネリズムに陷りかけてはゐないだらうか。それを救ふ爲には、石河薫中心で座外作家の作品を上演してゐるだけではいけないと思ふ。家庭劇のファンの大部分は、十吾の藝を娯しみに行くのである。十吾の藝が飽きられゝば、家庭劇の生命は殆どなくなるといつてもよい。

十吾は實に達者な喜劇俳優だ。座外作家の作品でも立派に活かし得る技倆を持ち乍ら、何故それをしないのであらう。もう一つ僕が憂へる事は、あの健康的に惠まれてゐないやうに見える肉體で、苛酷に思はれる舞臺をつとめた擧句、幾つかの脚本までも書かなければならないといふ事はあまりにも自己酷使ではないか。それが何時迄續くかといふ事である。死んだ十郎が短命に終り、一世天外が短命に終つた前車の轍を顧みてほしい。五郎の健康體をもつてさへ、先月は倒れてゐるではないか。十吾が座外作家の作品に馴れる事は、どれだけ自己酷使を助けるかしれないと思ふ。同時に、彼の舞臺に新らしい一面を展く事にもなるのではあるまいか。

喜劇の價値と使命に就て

大久保佐陽子

『內攻』と云ふ言葉がある。幼兒の頃に一度は誰しもかゝる痲疹と云ふ病氣で、その熱が內にこもつて外へ出られない場合、此の內攻と云ふ言葉が用ひられ、その幼兒の生命は同時に奪はれて仕舞ふのである。

が、大人になつたからとて、此の『內攻』と云ふ言葉が、全然緣無きものになるかと云ふにさうでない。

否、寧ろ、その害毒はより一層深刻になり、その弊害は

一入大きくなるのではないかと思ふ。

先づ假に、茲に健康的な人間が一人居るとする。

彼は、生きる爲に、喰ふ爲に、或は人間的慾望を滿たす爲の野心、野望の爲に、又時にはさうした物慾を離れての人間的修業の爲に等々と、外部への戰ひと共に、內的鬪爭にもかなり惡戰苦鬪する。

かうした場合、その人間には、緊張と充實との自己滿足はあるが、その目的が長期に渡るも實現されず、內的の鬪爭力が次第に弱まり萎縮して行く時、遂にその人間は、發狂するか、發狂しない迄も、たしかに異狀を帶びた變質者になると云ふ事は事實らしい。

これとりもなほさず、內攻した大人の悲しい姿である。

茲迄書いて來たのでは、凡そ題目と緣遠い話のやうではあるが、私の云ひたいのは次の點で、即ち、此の住み辛い生き辛い、現實の社會に、さうした人間達を士氣し、鼓舞して行く演劇分野の中にある喜劇の價値とその使命が、茲に於て發揮され、必要缺くべからざるものになると云ふ點に就てゞある。

歌舞伎も新派もいゝ。島崎藤村氏の『夜明け前』山本有三氏の『唐人お吉』藤村成吉氏の『啄木』もいゝ。敎へられ、涙ぐまされ、壓迫される。

然し喜劇の分野は、自らその使命を異にして居るものなのだ。

例へば、これを人間的に例をもつて來て見れば、重苦しい苦惱と、ひた〳〵と押し寄せる寂寥を制服して生きて行く人間達は智者でもあり、强者でもあらう。然し、その人間に笑ひと云ふ者が忘れられて居たら、その人は屹度、情と云ふものを知らぬ、私達には親しめない、人間的に未完成な人ぢァないかと思ふ。

『笑ひ』と云ふものは、人から與へられた時も嬉しく、與へた時も心愉しいものである。

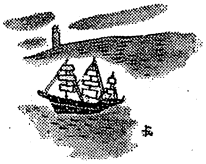
話が橫道にそれたやうだが、兎に角、笑ひはいゝ。

涙と寂しさはあまりに現實社會に多過ぎるからだ。

まして現下は長期建設の秋である。

達觀したものを底肚に据え、諷刺とペーソスを嚙みしめて哄笑し、內攻を吹ッ飛ばして明日の新しい生活に驀進出來るやうな、いゝ喜劇の增々上演される事を望み、又觀せたいものである、と望むのは、豈、私一人ではないであらう。

演劇報國を旨とする我が社の爲めにも、各所屬劇團の人々の爲にも、又廣き一般觀客の爲にも、私はそれを願ひ、望んで止まない。



街の喜劇

楠本木念仁

街路を舞臺に展開される喜劇の數々。實際の舞臺には、使へぬネタもあり、既に使用濟みのネタもある。あれやこれやを採錄したノートから、書き拔いて見たものゝ、果してこれ等の小ドラマが持つユーモアが、他の人々にどの程度に感じられるか。單に貧しい喜劇作家としての獨りよがりの微苦笑に過ぎないか。?を打つて讀者の批判に任せて見やうと思ふ。

○可愛いピエロ

北大阪の繁華街の晝下り。着飾つたのやら、着飾らんのやら、絡繹たる人波を縫つて踊り狂ふピエロがある。帽子から爪先まで眞黑々の、と云つて別段喪服を纏つてる譯でもない。彼は煙突掃除人である。文字通り眞黑になつて稼いだ收獲を一杯の泡盛に替へたのであらう。蹣跚たる足許も危く、娘さんの袖に、インテリのズボンに、奥さんのコートに。故意と身體を擦り附けて歩く。兩側の店舗に飾つた商品の山にもたれ掛る。店内から腕つ節の强さうな店員が腕を扼して飛び出した。街の與太者らしい若者が、拳固を固めて寄らば撲り倒さうとの待機の姿勢。だが、このピエロにだけは手が出せない。觸れば落つる煤烟。長いブラシから黑い雪が初夏の風にヒンプンと四散する。手の附けられないのをよい事にして暴れまはつた不潔いピエロは、暴れ疲れて、ソレでも横町の淋しい所を撰んでペープメントをベットに大の字に寢込んで終つた。黑い涎と黑い泡。何が强いたつて、天下これ程强い英雄は一寸無いだらう。

○笑ひと怒り

僕の住む町に二人の名物男が居る。居るたつて此町の住民でなく、何處からか日に一度は漂然とやつて來るだけで何處に住む人間だか知らない。二人共頭腦のゼンマイが狂つて居るのだ。即ち狂人なのである。甲は何時も醉拂ひ見たいに威丈高に反り返つて、何者かを叱り飛ばして歩く。劇烈な口調で譯の判らぬ罵言を泡と共に飛ばせながら、見えぬ相手を怒鳴り附けて歩いて居る。狂人の中でも、よく〳〵不幸な男だなと僕は思ふ、忿懣戟怒。休みなき感情の異常亢奮。下積人種の不平不滿のエッセンスを代表した樣な男だ。乙は甲とは反對に、年中相好を崩してエヘラ〳〵笑いながらピョコ〳〵頭を下げては誰かに向つて謝罪つて居る。これも下積人種の屈辱との象徴見たいな狂人である。此二人を一度正面衝突させればどんな珍妙な場面が演

出される事だらう、一度嚙み合せて見たいとは、町の人々の常に抱く惡戯つ氣であつた。が一人は午前に一人は夕方にしかやつて來ない。所が丁度、町の氏神の祭禮に雜踏する人群れを縫ふて、怒髮天を衝く形相で甲の狂人が表門から入つて來た。と、誂えた如く裏門から乙の狂人がピョコ、、、エヘラ、、、と顏の紐をだらけさせて入つて來た。當然相反した性格の狂人が正面衝突をなすべき機會は今來たのだ。群集はザワめいた。日頃の好奇心を滿喫させて呉れる日は來たのだ。二人の狂者を取卷いて、次に展開さるべき情景に胸を躍らせながら二つのグループはヂリ々々と接近して行く。五米突。三米突。一米突。水泳のゴール見たいにハラ々々しながら兩人の顏合せを群集は焦つて居る。怒號する狂人と笑倒する狂者とは寸尺の距離に相接した。雨か風か。所がである。狂人とはこんな者だと云ふ事を群集は敎へられた。即ち怒れる男は怒れる儘に。笑へる男は笑ふが儘に。我關せず焉と擦れ違つて通り過して終つた。火花を散らす大活劇を豫想した人々を見向きもせずに甲は裏門に乙は表門に裕々と姿を消したのである。狂人に馬鹿扱ひされた群集の阿呆らしさを想像せよ。

○宇治川の先陣

宇治川の淸流に臨んだ旗亭に會する事にあつて京阪宇治沿線の客となる。櫻に早い三月の末の事であつた。宇治で下車すると橋の訣に十人餘りの人々が橋下を俯瞰して何事か騷いで居る。僕も仲間に加わつて橋下を覗くと、水面下二三寸の淺瀨に一枚の五拾錢銀貨が落ちて居るのだ。半圓銀貨。コーヒなら五杯。昔であればこれ一枚で安い貞操を購へた貨幣である。誰しもこれを拾つて貧しき財囊を豊にすべき筈である、所が誰一人として拾ひに下りる者が居ない。何故だらう。よく河州を見ると、銀貨の沈む場所は僅に二三寸の深さだが、河岸からそれに達する途中に水流の工合で一條の深い流れが邪魔をして居る、深さは二三尺に過ぎないが。未だ溫まない早春の早瀨。裾をからげて流を亂す勇者は見當らない。すると突然近所の長家のお神さんらしき勇敢にして大膽、恥と怖れを知らない女傑が一人登場した。背に赤ん坊をネンネコにて脊負上げた儘、河岸に降り立つてまづ下駄を脱ぎ、足袋を脱し、裾をからげ始めた。橋上の見物が如何に悅びによめいたか諸君の想像に任せる。やがてお神さんは泣く子をあやしながら流をジャブ々々々涉り始めた。次第に水は深くなる。下腿から太腿冷い急な流れに足を取られまいとよろめきながら、目的の箇所に漸く到着した。橋上で誰かゞ萬歲を叫ぶ。と。どうしたのかお神さん、茫然と河州に突立つた儘、銀貨を拾上げやうともしない。橋上からはどうした々々々との聲援が降る。お神さんの曰く「五拾錢銀貨やおへん。お茶碗の糸底どすがな」

英雄と名優

曾我廼家　五郎

笑ひの芝居でいかつめらしい、曾我廼家と云ふ藝名を名乗りまして古英雄の名を無斷借用いたしました不屆者、七百年前に富士の裾野に鎭まり給ふ御兄弟の尊靈に申譯もない次第、世間樣では曾我の家と云へば、早や此頃では笑ひの代名詞にまで云はれる樣になつただけに、尙更申譯の筋相立ち申さず、謝り證文一札依而如件ではすまぬ譯、武士ならば切腹仕事、申譯なさに先月末自腹を切つて、富士の裾野の苔むす墓前に參拜して、謹而御詫申上げました。

明治三十六年十二月、故十郎と共に笑ひの芝居を創めようと、裸一貫で抱き合ふて劇界の荒浪へ、飛び込みました當時、さて藝名はなんと名乘らう、義兄よ片腕かしてくれよと、差し出した私の腕をグツとつかんで、承知した命がけでやり遂げよう、お前は右腕、俺は左の腕だ、右さんと人が呼べば、お前はハイと答へよ、左さんと來れば私が返事すると、奇智ほとばしる義兄の面影今に眼に浮びます。

「前後亭左右」夫れは三日間程名乘つた藝名、或る夜寢られぬまゝに古い娯樂雜誌をくりひろげてフト眼に止まつた「曾我物語」の講談速記、署名はたしか玉芳齋とあつた樣に覺えてゐます。ひろげた個處は曾我五郎が本望遂げて、賴朝の面前に繩つきで引張り出されて、訊問を

うける處でしだ、芝居でやる「曾我の敷皮」あそこです、本望遂げんが爲十八年苦勞の努力を續けた物語りを、時の大將軍の前に恐れ氣もなく焰の如き息と共に、口をついてほとばしる講談のクライツマクスでした、讀む内に五體は震へる程の昂奮を覺えて、自分もこれからの茨の路、苦勞の荒浪、乘り切らねばならぬ笑ひの芝居、此意氣だ、此英雄曾我五郎にあやかりたいと突嵯に其の名を藝名に名乘りたいと怖ろしい野心を抱いて義兄の傍へとんで行きました、折角お前が考へてくれた藝名だが私は曾我廼家五郎と名乘りたいとハツキリ言ひ切ると一寸義兄は眼を丸うしましたが、强情で氣まぐれな私の性格を知つてくれてゐるだけに直ちに同意をしてくれてそこで俺はなんと名乘らうと來た、君は年が上なんだから無論兄貴の十郎と名乘つてくれ、心得たりと云ふ譯で曾我廼家五郎、十郎といふ藝名がなんのわだかまりもなしに生れた譯です。

建久四年五月二十八日古英雅曾我十郎祐成は此世を去つて居ります。

大正十四年十二月四日故名優曾我廼家十郎は此世を去つて居ります。

時代こそ違へ古英雄と故名優は、極樂淨土で巡り逢ひ嘸や祐成さんに義兄は叱られてゐる事でせう。

合掌

繁華街に近く、交通至便
閑雅な和洋室！
◉モダン階上浴室新設◉
南地ホテル
一宿一半
二圓
三圓
憩半額
南地戎橋電停前
電話南四一四・四四一

三つの惱み

曾我廼家　大磯

今年度初の歌舞伎座出演に就いて、何か書くやうにと原稿紙を頂いたものゝ、扨て昭和七年十二月初出場しましてから足掛け八年、今更御期待に添ふ程の珍談もなく、何しろ心臓の弱い私只我無沙羅に御指定の紙數を汚さして頂くことを先づ以つてお詫びいたして置く次第であります。

昨日東京の國際劇場の話から或る新聞社の方が大阪の歌舞伎座にもマイクロフオンの設備がありますか……と尋ねられました、曾我廼家が永年根城としました道頓堀の中座の舞臺が間口十間餘、東京の元の新富座が間口十二間で初めて出演した時は、その廣さに一時はウロが來た程でありました、それも遠い過去となつて今日では次から次と大劇場の續出となり、大阪の歌舞伎座など聲量の乏しい私がお客様に滿足して頂いてゐるかと出場毎に大きな惱みの一つであります、殊に聲を殺して使ふ女形の私です、役柄によりましてはそれ以上の低い聲でないといけない場合がありますと、私の惱みは益々深くなるのです、向ふ正面、菊席は櫻席の御見物には……と、部屋の者を前へ廻らす以外、自分の聲量をはかる道がありません、この際貴誌を通じて皆様の御鞭撻と御指導を仰ぐ機會を得ますればこんな喜ばしい事はありません。

昨年の十二月興行で〃愛〃を上演いたしました時など、私は義太夫流しで〃小林しげ〃と云ふ老婆役でしたが、義太夫を語り乍ら下手奥へ去つて行くのに、語る文句も節廻しも變りませんのに、廣い舞臺の爲め、足數の多いのには又惱みました、ある人の言葉に、「惱みのない人間には進歩がない」と、私はその教へを金言として、〃惱〃にぶつかりますたびに、新しい道が拓けて行くと心を勵まして居ります、あの廣い舞豪から花道へ入り揚幕から奈落を拔けて、二階の私の部屋まで、まあ何町ありませう、寒がりの私は、亦暑がり屋です、冬はストーブに火鉢、その他人一倍の防寒具の用意、夏は又、銷夏法に凡ゆる方法を用ひます、ヤレ〳〵と樂屋へ入つて涼をとつたり、暖をとるのに又惱みです、併し地方の劇場と違つて歌舞伎座は此點、完備したものです、夏は冷房、冬は暖房、しかしそれは皆様をお迎へする觀客席のことで樂屋には冷房がありませんのでこれからの暑さになりますと、一寸でも早く扮裝をして涼しい舞臺へ避暑にまゐります、誠に有難い事です、冬など

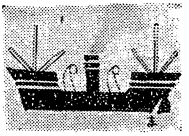
火鉢にグワン〳〵炭をおこして、第一火の用心が悪いし、COとか云ふ毒瓦斯も出るそうですし、私など火鉢の中の吹殼に世話が燒けて仕方がありません、女形である丈け樂屋でも家庭的で有ります……。

近代的設備の完全な歌舞伎座と地方の劇場の不完備さとを思ひ比べ、半年振りの今度の出演にもしみ〴〵その感を新らしくいたします。

むらさき

若いもの四五人集り話して所へ、又一人友達來り、「これ〳〵珍しい木を見て來た。「何だ、どんな木だ。「木もむらさき、葉も紫、花も紫、實も紫の木だ。「ムゝそりや珍しい木だ、何といふ木だ。「何とか名はいつたつけ忘れた。いつて聞いてこやうと驅出しばらくして來り、「聞いて來た〳〵。「何といふ木だ。「なすび。

【壽々葉羅井より】



東京と大阪

曾我廼家　小次郎

私が曾我廼家に入座して二十五年餘を、東京と大阪に行きつ戻りつ、今なほ月毎の往復をつゞけて居ります、その土地の差異や風習に、敏感であつたであらう神經も、今では痲痺しておたづねの（東京と大阪）と云ふ問題にお答へする資格のないのを殘念に思ひます。

しかし關東大震災を契機としてその東京色、大阪色の特異性が消失したのぢやありますまいか。舞臺でも、服裝で東京人、大阪人を表現することは至難となりました、言葉の上にも純粹の江戸辯、大阪辯はその土地でさへ聞けなくなりました、「大きに」「阿呆らしい」なんか、最早や通用語でありませう。

大阪の町を歩くと和服が多く、東京では洋服が多い、東京は天ぷらにそばに彌助、大阪は酒にうどんが甘味い、大阪人は經濟的だが東京人は宵越しの金は使はない、そんなこんなも一ト昔の話です、先日大阪から友人がまゐりました。〃僕は東京は初めてだ〃と聞いて私は奇異な感をうけて大いに驚きました、大阪の人で東京を、東京の人で大阪を、知らない人は我々のおつき合ひしてゐる方の中には先づなからうと思ひこんで居た私が輕卒だつたでせうか……。都會人と地方人、勞働者とサラリーマン、サラリーマンと資本家、保險屋さんと思つたらラヂオ屋さん、菓子屋さんと思つたら牛肉屋さん、藝妓に女給、令孃と奥さん、看護

婦に女中、通りすがりに見たのでは、見境ひがつかなくなりました。地方巡業しましても土地々々の風習の特異性が次第〳〵にうすらぎ舞臺に於ける扮装なんか役の職業、階級を如何に色別したものかと苦心であります、これも國民總親和の結果でせうか？〃 支那事變を契機として、日鮮は無論のこと日滿の風俗の差異さへ日増しに接近してゐます。（東京と新京）の―― どつこい、男爵機が歐亞連絡飛行に成功した今日です。（東京と獨逸）に就いて次の機會には私の蘊蓄？を述べさせて頂きます。

大阪と東京の食べ物

志賀廼家　淡海

食べ物と言ふても數多い事で何を選ぶのか先づ私としては今日迄殆んど我國の領土全部と言へる程巡業して到る所の宿屋生活、行先々の珍らしい料理も食べて居りますから先づ料理を主として記憶して居る味覺の内二、三申上げて此責任を果したいと思ひます。

私が東京の有樂座に出演したのが二十數年前其頃は東京の料理をとても甘辛いコツテリして居る不味いと言下にぶつ放した

〃酒〃　の味が惡かつた事を記憶して居る。其後二十數年間に東京の食味界もどんなに推移し變化した事であらう――。近頃は上方から板場を招かれるのか入込むのか？　すると見得上方風の料理が出る樣になつた。今日では東京と大阪の料理に付いて大書すべき程の差は無いように思はれる。

〃味〃　覺と言ふ物は人々の間に大抵共通して居る樣で有るが中には甘い辛いの判斷にさへ異論を稱へるやうな人も多いのである。

然し一人々々に依て異なる判斷を下すと言ふも人の味覺はさう大した相違のある物でない。食味上の體驗程度によつて同じ料理でも甲は美味と言ひ、乙は不味とも言ひ得るのである。私の言ふ事が必らずしも當る物でない事をも附記して置きたい。

東京の味がコツテリして居ると言つた時代は上方と醤油の差でも有ろと思ふ上方のように淡口を餘り用ひなかつたらしい。出來上つた料理の色がどす黑く砂糖も量が多い。

今一ト息淡口を用ひられる事を望みたい

〃鱧〃は東京では餘り多く使はない

と見得て骨切が不拙いハモの骨切は上方が良いと思ふ。不拙い調理部員にハモの骨を出されて若し多量に食べたなら胃の弱い人は胃袋の內膜を傷だらけにして胃袋からキラレ與三郎が誕生するだらうと思はれる。

〃天婦羅〃　は矢張東京が本場だ。銀座の天國、濱町の花長、赤阪の華月下谷の天民、人形町の天甚、天一、とても美味しい。其各家々の主人が信ずる所に進み皆一得の風味風格がある。然し近頃大阪にも美味い天婦羅屋が出來出した事を喜ぶ。

〃鰻〃　は若い頃大變好物で相當食べた東京の鰻は全く美味いと言へる。鰻の質の良いのを選ぶ事は勿論だが、たれの甘さ辛さとむし加減に蓋具合、燒鹽梅、茲に腕の必要を痛感せずには居られぬ無論名代の家々には各一つ宛の秘術を藏して居る秘術を有して居ない店は永久性の人氣は勝得られない。

〃大〃　阪の鰻は暫らく食べなかつたが今年の春宗右衛門町のはり半で食べたがとても美味かつた吃驚する程の味だつた。餘りの美味さに最一度行きたいと思ふ內、東京角力の來て居る時櫻ビールから招待されて男女川、高登楯甲關等と共にはり平に行つた私は舞臺の都合で一時中座してのこして行つたが出て居た。其時は餘り美味しいと思へなかつた。鰻は座敷に出たれば早く食べる事が肝心である。料理はなんでもさうだが一ト息入れてから食べて美味い不味いと批判を下す事は慘酷である。

〃鯨〃　は大阪が良い一等品になれば牛肉よりも鷄肉よりもアツサリとして風味がある。東京では鯨を餘り食べないのか知ら！大阪で食べる美味しい鯨の味は未だお目にかゝれなかつた。

〃鷄〃　は東京と大阪と大差はないと思つた。亦兩方共賞讃の辭を大書する程で無い樣に思へた。但し煮揚がつた鐵砲鍋の鷄の味は矢張醬油とだしと煮法の加減か大阪が美味しいと思ふ。

〃上〃　方の突出（東京のお通し物）は東京に軍配が揚ると思ふ。東京は餘程研究したらしい。大阪のお茶屋は大抵一定して餘り感心した突出しは出ない。東京の待合料理屋のお通し物は仲々美味い。シャレた粹な物をいつも替り替つて出す、之れは上方の其道の方は研究を望ましい。

〃漬〃　物の內東京のベツタラ漬は美味い。京都の千枚漬と亦變つた風味がある。

〃う〃　どんは大阪が美味しいが、蕎麥は東京が良い。然しだしは上方風にした方が色も味もアツサリして良いと思ふ。

〃料〃　理屋と飲食店は大阪と東京と合せば約五萬軒あると聞く。此大した數の料理鹽梅、私達が兎や角批判するのは實に言外の沙汰？、鈍舌盲評多謝。

高安月郊

一、教訓めいた理屈が露骨に出る事があるが、おのづからさうなる様に望む。

二、笑の中に涙のあるのは大進歩であるが、丸でをかしみのないのもある喜劇の本分を失はぬ様に望む。

三、一幕物に限らず、二幕三幕と續くものも出す様に望む。

額田六福

十吾君の處で望みたいのは髷物の新作演出だと思ひます。五郎君の方では已に前々から手をつけて、それによつて成功してゐる作があります。十吾君にしてやらぬのはどうでせうか。あまりに大事をとりすぎると思ひます。髷物をやれば取材の範圍もずつと廣くなつて、今一段と面白い芝居が出來ると思ひます。玉に傷です。髷物をやらない事は。

水谷幻花

五郎劇は現在の儘で押して行くもいゝが、一幕劇にもう少し力を入れて貰ひたく、五郎が都度顔を出せば尙ほよし。

家庭劇、無理な注文かも知れないが十吾の白塗を一度看たいものだ。

坂本猿冠者

家庭劇曾我の家へ對して注文があるかの問ひ合せ、注文を出すとなると數限りなくあるし、なしと云へば又云へない事もない、と云ふのは、兩劇壇とも未完製ではない完全とは云へないかもしれないが、立派に存在して毎月他の劇壇よりはより以上の成績を上げて居るのが何よりの證據である、注文を出すのは海のものとも山のものとも分らない劇團へ對しての事と思ふ、あゝもしたらよくなるだらうと云ふ處に注文を出す方にも張合がある、曾我の家劇家庭劇には固定してしまつてゐるから今更ら注文の出しやうがない、强いて

出せと云ふのなら五郎は飽くまで五郎らしく十吾はあくまで十吾らしく兩優が持つ個性を見物にもつと〳〵押賣りする事である。

本山荻舟

一、五郎には喜劇の通し狂言を注文したし、これは數年來提唱せるところなるが、急速に實現困難とすれば、せめて二幕五場位で、ガツちりしたところをみツちりと見せてもらひたし。五郎劇打開の唯一路と信ず。

一、家庭劇で良心的な時代物の喜劇を見たし、但し五郎劇の番物とは、內容形式共に特異なものなるといふまでもなし。

中井駿二

一、五郎劇に註文したいこと共。作者としての五郎が大いに新時代の風潮に適從しようとして努力してゐる事は認められるが、聊か「老妓のパーマネント」といつた傷ましさが感じられないものでもない、この際思ひ切つて座外の作者の脚本を手懸けてはどうか。

一、家庭劇に註文したい事ども。この一座はその成立が混成的である爲演技のアンサンブルといつたものがなく、又フレキシビリティもなく、現在では全員擧つてその演技法が固定してしまつてゐる。新しい演出者を隨時迎へる事が必要だと思ふ。

長谷川伸

五郎劇に——上方番物が一幕欲しく思ふ。歌舞伎系の番物ではなくして上方の番物、いひ直すと〃新型番物〃

家庭劇に——第二第四第五の演しものの中一ツだけ、年齢の若いものを起用する、といつてシンをとらせたりワキを勤めさせるのではない、せい〳〵ツレ。といへば若ッを一ツだけ彩どらせること。

川尻清潭

曾我廼家

斯う云つた計りでは、五郎座長は決してすぐには肯きますまい。其理由も說明も大半は分つてゐますが、一言で言へば、作の內容にもう一歩進んだ新鮮味が欲しく思ひます。大磯君は勿論の事、其他の俳優諸君にも、充分腕を持つた人々を持つ此一座には、必ずそれが一脈の新生命を作られます。

家庭劇

家庭劇は殆んど十吾の藝で持つてゐる一座です、但し此優は役の區域が狹いだけ、從つて脚本の範圍も狹い事に於て、此喜劇一座には必要のない人々が、客の求めてゐない狂言を敢て見せてゐる形ちであります、曾我廼家をトンカツとすれば、家庭劇は精進揚です將來は單に人情劇計りでなく即ち曾我廼家支店でなく、全然趣向を變へた、新らしい形式の思付きで、張合ひの對立です面白く思はれます。

鎌谷慶二

一、五郎劇には、一堺漁人氏に、以前のやうな旺盛な創作力を、望み度いと思ひます。

一、家庭劇は、その輕いプリンの味にも、漸く飽きが來た、こゝらで何か新らしい味覺を、出して欲しいと思ひます。

中井浩水

一、五郎劇に注文したい事。

一、家庭劇に注文したい事。

ともにもつと〳〵〳〵面白い脚本を上演して欲しいといふ一事に止る。

淺野武男

一、五郎劇は愉しめる。それは顏馴染みの俳優が毎も同じやうに笑はせるから。併し脚本では笑はない。そこに一堺漁人のマンネリズムから脱却して外部に新喜劇を求める必要があります。映畫「我が家の樂園」を五郎劇風に翻案、長篇喜劇として試みては如何です。

一、家庭劇は五郎劇より近代性があると自他共に認めてゐるのが大きな錯覺です。此の劇團こそ新人が多いのだから、風俗的近代性でなく內容的近代性のある新喜劇を勇敢にやる可きです。

兩者共に新しい試みも數回位な失敗で止めては駄目、五郎十吾合同喜劇祭など大いに新喜劇精神總動員の意氣を見せて出來ない相談の巨彈をぶつぱなす事です。

婆田正男

一、五郎劇に註文したい事ども

むかし上演した洒落た脚本の再演を切望します、近頃は東京、大阪、神戸京都と同じやうなものをグル〳〵持ち廻つてゐますが、永らく演らないむかしのいゝものを時折見せて下さい、黃表紙仕立てのものもやはり時々演つてほしいです。

一、家庭劇に註文したいこと

三つ目に新派物復活をのぞみます、近頃のやうに五本とも喜劇ではどうかと思ひます、俳優陣も揃つたやうですから實現して下さい。

稻垣林之助

△五郎劇に——五郎があせつてゐる新作を理屈ぬきに他から求める氣にはなれないか、さうさへすれば役者は手揃ひだしキツと面白い芝居がやれると思ふ。

△家庭劇に——何も〃喜劇〃のみに終始する必要もなからうが十吾が得意のお婆サンに扮する場合、どうも悲劇的要素が强くなつた傾向がある、然し家庭劇のファンはやはり明るい笑ひを望んでゐる筈である。もう一つ、補强工作としていゝ端役の役者がほしい。

酒井七馬

五郎劇へは……

女つ氣の無い五郎劇へ一マイ

名女優を推薦致したし〃ミス・ワカナ〃

家庭劇へは……

茂林寺文福氏に〃時代喜劇〃を一本モノしてほしいです。

高谷伸

註文の註文を受けましたが御註文通りの名答は急に浮ばぬチュウモンですその時々の劇評に註文らしいものを書きますが五郎さんは自信のある人今さら素人臭い註文も氣がひけますし、家庭劇もそれぞれ手が揃つてゐるので時節柄無理な註文狀は濫發しないことにしませう。

吉本寛汀

五郎劇に——

▲通し狂言風な、五、六場の相當深みのある長篇脚本を一遍取扱つて見ては如何、今更彌次喜多や水戸黄門漫遊記でもあるまいが、あゝいふ組立で行くのも一つの方法だらう。

▲五郎式の教訓劇も特色として悪くはないが、サア此處だと言はぬばかりに開き直つての說教はなるべく避けたい、美味しい喰物の中から齒に合はぬ硬いものが飛出した時の氣持がそれではないか。

家庭劇に——

▲日曜日の晝に特選狂言として淸純な、少くとも戀愛をテーマとしない、學生、子供に見せても良いものを上演してほしい、といふ人がある。

▲鳴物の使ひ方にもう一工夫して貰ひたい場合がある「八兵衛橋」の火事場の幕切れに大太鼓を打込んで十吾らが思入れをするなどがその一つ、もう一歩自然味に近づけて火事場の情景にふさはしい音響でありたい。

丸山耕

曾我廼家五郎が喜劇王となり、和田久一が天下の名士となるにつれ曾我廼家劇までが變にインテリ振つて向上？しては大衆的でなくなると思ひます、矢張りこれはいつ迄も最初の意氣と若さを失はぬやう面白く可笑しく見物を悅ばせて頂き度い。

松竹家庭劇は今發達の途上にあつて危な氣なき生長を遂げつゝあるは何より、これ皆十吾君の盡力と思ひますから依然この人を中心、但し同型やマンネリズムに墮ちぬやうます〳〵活躍して下さい、それから宣傳ヴアリウを狙ふのが義理足しか知らぬが、なまじ變な局外作は不用と思ふ。

永田衡吉

悲劇を主にして笑ひのにぢむもの一本を五郎劇に賴みたい、五郎の風格年齡はもうそこまで行つてるとおもふ。

家庭劇に望みたいのは山上氏受持ちの三番目を周圍の狂言から斷然切り離した喜劇ならぬ正統派(?)の芝居として欲しいことである。

八木善一

五郎劇へ

五郎中心主義に手加減を加へて貰ふ事と、劇の内容の諒さに一考を煩はせたい。

家庭劇へ

十吾の役から洋服と江戸辯をカツトして貰ひたく、小織その他の新派狂言に名篇の出現を望む。

野田宗二

五郎劇への註文

「現狀維持」は五郎劇近來の態度であるが、いつまでも人氣と地盤の自已陶醉は禁物である。五郎劇へ望むところは、脚本の選擇と演出に清新味を盛るべし、五郎獨演喜劇の弊を捨てよ「曾我廼家型」の舊い殼から一歩前進せよ——等々。一堺漁人作のよさ、面白さももちろん或る程度結構だが五郎趣味に偏しすぎてゐる、その弊を一新する爲めには脚本選擇の視野を擴げ新鮮な喜劇を加えることを期待する。

家庭劇への註文

家庭劇は取材の狙ひどころに時局の話題を捉えた新鮮な喜劇が多く演出にもサラリとした味がある。五郎劇に比べてモダニティもある。それが家庭劇のよい所で、その點を伸ばせて行き度い。ニュースの喜劇化もいゝが十吾の飄々乎たる味を生かせたコクのある人情喜劇の傑作を待つ。第三に据える新作脚本はユウモアの多い作品を成可く選擇されたい、映畫的なギャグを舞臺に活用するのも一つの手である。

入江來布

一、「五郎劇に註文したい事ども」の一つには、いや、註文でなくて御相談の一つであるが「そろ〳〵少しづゝ淡白味を加へてほしい」といふのであるが、併し、本來五郎劇は「濃厚」が特徴であるから、少しでもそれを緩和することは自ら自身の特徴を稀薄にすることになる、殊に觀客層が意外に厚くて、中流階級に案外ファンがあり、今なほ大入續きの全盛時に於ては、さういふ相談は現狀に即せざるものであらう、さて今迄拜見したものゝうちでは「勸進帳」が將來性を示唆するものと思つた。

一、「家庭劇に……」は先般お送りした拙稿に書いたからそれに讓ります。

ビステキ専門店
湊町
スエヒロ
三階 宴會場新設
湊町北詰阪急ビル
電櫻川四七九三番

劇壇往來

五月の大阪は前の月の歌舞伎華かなりに引更へ颯爽として青葉陣の眺めなり。先づ歌舞伎座には新國劇が八ケ月ぶりに登場、狂言は東京で好評を博せし「坂本龍馬」に「日本の合奏」「沼津兵學校」を出し二十日より更に二の替りとして「日本の合奏」はそのまゝに「齋藤大使」「越後獅子祭」を出して氣勢を揚ぐれば、中座の前進座は「若き啄木」「勸進帳」「傳八戀の引窓」で堂々と戰ひ、角座の新舊合同劇は「競馬風景」「女の教室」「源太しぐれ」で六日より月末迄、二の替り無しでブッ通しの盛況を續け、浪花座は伏見澄子一座の實演に松竹新興の映畫籠寅特撰のまんざいにて相變らずの滿員續き、文樂は「菅原傳授手習鑑」「朝顔日記」「藤栗毛」を本格興行として十七日まで打續け翌日よりはニュース映畫となり京都南座は延若魁車、長三郎、壽三郎、扇雀、市藏等の一座に宗十郎を加へて「新編忠臣藏」「二月堂」「釣女」を並べ神戸の松竹劇場は六日まで伏見澄子一座にて九日よりは松竹家庭劇が乘込み「戀の出前持」に「卒業式當日」「一日だけの新家庭」「ハフトン婆さん」「恩義」を出して例に依つて大好評、十七日よりは此の双方が入替つて神戸に東西合同劇が移り、京都へは家庭劇が第五の恩義を第二の春を差替へて双方ともに滿員續き、青葉若葉に風薫る初夏の芝居街は前月に劣らぬ盛況振りを示しぬ。

一般宣傳廣告取扱
岡本商事社
大阪市住吉區
住吉町一五六八

旅行日記抄

佐谷大升

三月二十八日　晴

朝九時半東京着。アニキと驛で別れて第一ホテルへ行く。室がなく約一時間ロビーで待せられる。十二時前からフアン歴訪、夜ホテルでアニキと落ち合ふて柳橋へ行く向島へ梯子して泥醉アニキの藤枕で寢て仕舞ふ。

三月二十九日　曇

九時から東京市内漫歩の寫眞撮影、僕は宿醉氣味で弱る。アニキも疲れたと云ひながら頑張る、四時過ぎ終了。五時からアニキの文筆家招待會〳〵隨伴クタクタになつて八時からの都新聞社連中の晩養會へ行く、本日は勞動强化に參る。明日は稽古である。

四月一日　晴

初日、各新聞社挨拶廻り。後アニキと石河さんと三人でニューグランドで晝食して部屋入、大入であつた。

四月五日　曇後晴

志村立美から電話に起されて夜十時に銀座で逢ふ約束する、夜新興喫茶にシャン在りと志村の案内で行く。十二時豪雨の中をホテルに歸る。車なくぬれねずみなり。

四月七日　晴

雨にぬれて引いた風邪が咳になる。女を見に出掛けて風邪を貰へば世話はない。

夜、電氣を消して窓越しの薄明りで風邪藥を呑むで寢る。

四月八日　晴

眼が醒めて枕元を見れば昨夜呑んだのは風邪藥にあらず、書生が包んで呉れたエビオス、あわてゝアスピリンを呑み直す、劇場へKさん來る。頂いた菓子を分けて食はんとすれば陶器製の惡戯玩具なり、癪に觸つたから、旦君の家へ屆けさす向ふも怒つて居るだらう。

四月十三日　雨

世界を翔けし男を帝劇へ見に行く、馬鹿々々しい映畫なり、コロンバンの二階で晝食、久板榮二郎、鈴木英輔兩氏に會ふ、家庭劇の評を聽く。

四月十五日　晴

休日、富士館にて我家の樂園見る、面白しそれから淺草柳橋、吉原と梯子する。

全く酒は不可ん。あゝ酒のない國行きたい。

四月十九日　小雨

閉場後、銀座裏のバーにて、岩田專太郎、志村立美、小林秀恒、島田正吾伊志井寛、一龍齋貞丈、などと會飲、

此んなメンバーなら四斗樽を空にする事請合なり。

四月二十三日　晴

池の頭を散歩する、東上してはじめて家内と肩を並べて歩るく、全く家内に氣の毒みたいである。夜よし町へ招待さる。

四月二十七日　晴

又二日醉なり、東京の酒は全く惡るい、酒と肴は大阪に勝つ所なし、左黨の天國浪華の土地へ歸心矢の如し。

四月二十九日　晴

夜十一時發にて東京を出發、澤山な見送りである、去年六月東京を去る時は二三人の見送りだつたが此んなに知り合ひが出來たかと驚く。そして東京の地にもつともつと根を生さねばいけないと思ふ、とに角今度の東京公演は成功だつた。

左樣なら東京の皆さん。（了）

メモに代へて

西尾福三郎

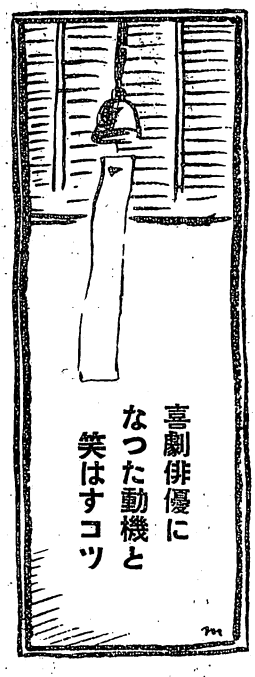
一、五郎劇

自作自演自監督と云ふ劇團ファッシズムの尤もよき見本として今日迄の五郎劇を見て來たが、これはもはや昨日のシステムである。五郎劇が今後とても歌舞伎的組織と歌舞伎的演出で終始するならば論外として、もしさうでないならこゝらで一つ時勢に即應した新しい試みに踏出しては如何。例へば御大をワキ役にした一落た一幕物だとか、又は女優を加へた軍事劇のやうなものを。

それから五郎劇を一貫した道釋風な教說と妙な熟語の頻發とが昔乍らに改められないのが氣になります。

一、家庭劇

五郎劇が昨日の喜劇であるに比してこれは今日の喜劇である點萬人の認むる所。たゞ家庭劇の弱味は五郎に比すべき大黑柱役者を持たない事でせう。十吾が中心でゐ乍ら肝腎の三つ目狂言にこの人がめつたに出ない事がいけません。いつも新喜劇と銘打つた三つ目物が他の狂言に比して新派の俳優が演ずると云ふだけの相違であつて、內容的には他の脚本とさして見優りしない。これならばむしろ五本の內の一本に新派風な悲喜劇を加へた方がまだしも變化があつてよろしい。例へばこの間の桑木醫師とか、又は鳥江氏の花柳物とか、とにかくこれだけ雜色俳優を擁してゐるのだから單一の味よりも變化の面白さを見せねば嘘だと思ひます。



喜劇俳優になつた動機と笑はすコツ

曾我廼家　十次郎

此奴は六つかしいです昔しは脚本はなきが如くで無茶も笑いとなりましたが現今は脚本制度萬事は之れにもとづいての事でそれも相手次第甲のイキ乙のイキそれ〴〵に同じセリフでも其の人々に依つて持ち味即ち云ひ廻しが違ふ其れを受けてアウンの呼吸とでも云ひますかイキに受けてイキに答へるそして突嗟の表情としぐさにあると思ひますだから漫才の人々がコンビを撰ぶを要素とする故に目下の私はグレート曾我の家に在るの幸福を痛感いたしますがそのコツたるやなか〳〵以て死ぬ迄が修業と存んじます一寸生意氣めいた事を申しましたが處詮は笑ひの一兵士何とぞ御指導を……！

曾我廼家　一二三蝶

喜劇俳優を志ざした動機は五郎先生の門に入つて約一年程後です、初めは何の希望も目標もなく只漠然とつまり志ざさずに（變な言ひ方ですが）一年餘り喜劇俳優生活を送つた譯です、私の俳優としてのスタートは大正七年片岡仁左衛門（當時我童）の門に入りそのよき薫陶を得て未來の名優を夢見てゐたのですが幾ら腕を磨いても役らしい役はつかないよしや巧くなつたところで門閥のない者には出世の扉は堅く閉されてゐる歌舞伎の世界が嫌になつたのです。

お相撲さんの樣に腕次第で出世が出來たらなあと嘆じました、相撲程眞價のハッキリするものはない五郎劇は總親和總努力をモットーとした劇團で裸一貫で飛び込んでも努力と精進で幾らでも重用して呉れます、此の樂團で勉强してゐる自分は幸せです。

笑ひは人生のオアシスです强壯劑です貴賤貧富の差別なく一番手近に得られる快樂であり唯一の健康法です、此の無形のホルモンでありエネルギーである點を演劇を通じて提供する喜劇俳優の使命の重大さを痛感して……などと云ふ樣な大きな考へもなく只なんとなしの喜劇の世界にとび込んだ自分です。

でも一生を喜劇に捧げると云ふけな氣な覺悟は持つておりますそして喜劇は絶對に亡びないといふ確信もあります。

曾我廼家　十次郎

（一）

好きでなつた役者稼業と云つてはいさゝか時代めきますが同じなつたからにはやはり出世が仕度い然し歌舞伎の方は門バツでなければ駄目、新派の方は其の時既に功なつて立役女形二枚目三枚目等々一家をなして喰ひ込む處なく、日露の役以來斷然頭角を現わした喜劇をして唯一の曾我の家へと志ざしたが今だに在りし日の志望はとげられませんが御大にいつくしまれ先輩に愛され皆さんとも仲睦じく幸福の日を送つてゐます。

（二）

もつとスケールの大きい良心的な物が出來たら何十年何百年後でも喜劇が日本の國劇に成る時代がきつとあると信じてゐます。

喜劇役者は俳優であると同時に喜劇作者でなければいけません、少くとも多少作家的な創作力を持合してゐる方がよいと思ふ舞臺でその瞬間に出る警句にたまらぬユーモアーがあるこの奇智を縱横に使へた昔の口立時代が羨ましい。

笑はす骨など翁輩の自分にはよく分りませんが舞臺の意氣と間……言ひ廻し(科白廻し)ではないでせうか。

今流行の漫才の意氣と間には學ぶべきものがあります。

言ひ廻しは故人の先代春團治さんなどは將に名人だつたと思ひます。

誠に横道にそれた愚答で恐れ入ります。

曾我廼家　林　蝶

外人のサーカスで、甲乙の道化役者が

甲〃ワタクシ、オトコネコ、アナタ、オンナネコアリマス、ワタクシアナタニホレマシタ〃

乙〃オーライ、ワタクシ、アナタヲ戀シマス。ニヤーオー〃

甲〃ニヤーオー〃

と、甲、乙が猫の戀愛の物眞似です、私は思はず笑ひました、はたしてこれが健全なる笑ひのコツでせうか？

門閥なく、家柄なく、勉強次第で伸びられる我五郎劇です。前途ある君なぞ歌舞伎を志すよりも五郎先生の門に入れと、先輩の奬めに發奮して、喜劇俳優を志し、林蝶と云ふ藝名を戴いてから二十餘年間五郎先生の薫陶をうけました私であります。

と舞臺の問題になります時、先生の教訓の鋭さ〃御見物を笑はさうと思ふな〃と教へられます、卑俗な笑ひが萬一私の力でかもしだされたにしましても、健全なる笑ひが如何にして得られませう、永年喜劇俳優、否、五郎劇の一員として末席を汚し乍ら、未だ公演毎に滿足な演出の出來ぬ私ですから皆樣の御指導と御鞭達をお願ひいたします。

〃役者は一生研究だよ〃と五郎先生の言葉を心に刻み、一層の努力をしたいと思つて居ります。

曾我廼家　文　童

小學校でも組で一番小柄の私は十五六歳まで十二三と年がかくせるほど子供らしくダットサン型でした。

そんな小柄の私が歌や踊が巧いと云ふので學校でも人氣があつて休みの時間に教室を閉めて先生達に見せたり級友に聞せたり好評を博したものです。

三ツ兒の魂百までやつぱり幼かつた時から舞臺生活する可く運命づけられて居たものかもわかりません。

遂に念願叶ふて舞臺へ出たのが十歳の時です、よく初舞臺の時には昂奮して客に呑れたり上つたりするものですが私は小學當時の訓練が物を云ふたのか至極のんびりとやり遂げました。

仰げば尊し我師の恩で先生が俳優向きの教育をしてくれた事を心から感謝してます。

家庭劇入座の時先にも書きました通り年を三ツ程隱して十一ですと誤魔化して子役をやりました。

一座の人達はインチキを知らず十一にしては舞臺がしつかりしてるとほめてくれました聞く方では尻こそばゆい事おびただしい中に

は「年の割にヒネてるナ」と云ふ人もある。とに角誤魔化し終せてそれから八年、十九の時に適齢檢査が來ました其の時は二十一に成つて居たのですがあんまり誤魔化した期間が長いので自分もうつかりして居て「ホンニ二十一になつて居たわい」と我ながら氣の付く始末です。そふなると俄に一座の人達に笑はれる冷やかされる全く赤面しました。

家庭劇へ入座して當り狂言の（角笛）と云ふ牧場主の伴で子供の敵役をやりましたがそれが山口越夫君に代りその山口君が大人に成つたので十四一君がやり又その十四一君も大人になるでしょう。

そうした變遷を見ると子供當時の思ひ出に浸る時があります。

曾我廼家　十福

（一）

新派にゐました頃、背丈のヒョロ長いところから、君は喜劇が、いゝと煽てられて、一番目や切狂言で喜劇をやらされて居る内、自分でも好きになり、大正十年の夏今の十吾先生に師事して今日に及んでゐます。

（二）

さて眞の喜劇に入つてみますと、とても難しく今までやつてました事が、よくあんな馬鹿げた事を……と恥しく感じました。今でも十吾先生の教へに隨ひ演出される先輩の方の云はれる通り一生懸命やるのですが、それが滿足に出來ず、人さまを笑はす處か、笑はれてゐるやうな有樣で、實にお恥しい事です。早く人さまを笑はすコツを覺えたいと思つて居ります。

曾我廼家　明蝶

（一）

上海事變で内地に歸還と云つても出征したのではなく二十三歳の時役者生活に見切をつけて上海へ渡つて三年目滿洲事變から上海事變と成つて勤先のインターナショナルフヰルム會社が閉鎖されて内地へ歸りさてと云つて勤める處もなく元の役者に逆もどり三年間稼ゐだ金で劍劇の一座組織神戸新開地二葉館で興行中松竹座に上演中の曾我廼家の芝居を見てあまりの面白さに、たまらなくなり行く道はこれと五郎先生にお會ひして無理矢理にやつと願つて入れていたゞいたのが今日に至る。

（二）

正直に云ふとわかりません五郎先生初め先輩諸氏につゐて研究中と云ふのが今の僕です。

曾我廼家　壽美蝶

（一）

人生から笑を除けば墓場同然です、歐洲大戰に敗れた獨逸の觀衆の求めたものは喜劇だと聞いています。

現在深刻なる生活戰線に心身共に疲勞した一般の人は輕い笑を希つていると思ひます、私はチャップリ氏の映畫は必らず觀に行きます、そして笑ひます、泣かされます。涙から出る笑、笑から來る涙を私は愛します。其樣な意味で「笑と涙」の芝居を研究致し度いと思ひ曾我廼家一座に入座させて頂だきました。

（二）

第二の御質問は未だ研究中の私にとつては

餘りにも難問すぎます。その御質問に對し立派に御答へ出來る樣曾我廼家五郎先生に師事して勉强させて頂きます。

曾我廼家　勢蝶

尙玉稿は○○日まで……

以上に原稿紙を同封して、玉稿を書けとはひどすぎます、此方は玉稿よりは玉の汗です何しろ、大望を抱いて故郷を發足したと云ふ立志美談の持主であらう筈もなく、笑はすコツは、どうしたらよいかと迷つてゐる位、よいコツがありましたら皆樣お敎へ下さいませとお願ひ申上ます、こんな事書くのにも曾我の廼の癖に、「上ます」言葉でもなく、生地のまゝの大阪辯だつたらよいのですが、さて書くのにはどうも大阪辯は書き憎うて、なんぎだすわ、

私が十六の歲五郎先生の弟子となつて初の東下り新富座で初御目見得です、何しろまだ子供上り、最貧のお客さんに大阪言葉が面白いと云ふて笑はれるのがつらさ、土地の言葉に馴染まふと使うたのが、ややこしい江戸ッ子です、すると今と違つて樂屋では座員が全部大阪人です、亡くなつた蝶六兄さんがこのチビなにぬかすねん……おでこをコツン……皆は笑ひよるし、「一たいどない云ふたらよいのやいなア」……と私は泣き出す……、併し時の流れはえらいもんだすな、その蝶六兄さんも遂には、「全くです蛙があくびをいたしましてネなんて、江戸ッ子を笑ひのコツに使はれるやうになりました、從つて今では、私など東京で大阪言葉を使ひましても面白がつてもくれず、笑の種にも、骨にもなりません、それだけコツが一つ消え去つたと云ふもんだすやろなア……。

曾我廼家　五郎丸

（一）

元來新派俳優で有つた自分は曾我廼家劇を觀て興味を感じ進むべきは此道なりと轉向致しました。

（二）

五月十八日東京日々紙上で笑ふ丈でも高血壓が二三十は慥に下ると某博士が說いて居られました。爆笑、微笑、苦笑、冷笑等々笑には幾種か有ります劇の筋道運行に依ての笑、臺詞に依ての笑、姿體の笑！人生最上の靈藥？今全歐諸國の喧嘩幕も笑の爆彈一發打ち込めば直に解消すべきものを世界の續く限り喧嘩は永久に絕えざるものか持てる國よ持たざる國へ多少分配の情なき哉。

嗚呼人情紙より薄く、厚くなるもの滯銷の板ばかり！。

曾我廼家　天照

（一）

喜劇が好きだから喜劇俳優になりました。

（二）

相手俳優が如何にお可笑しなシグサをしても臺詞を云つても、こちらは絕對に笑はぬ事です。こちらなり相手なりが笑つた場合は笑ひは消されて了ひます、「しつかりやれ」と云う觀客の叱言はこんな時に起るのです、笑はすコツは實に文字に現すのは至難な事です。

曾我の家　泉虎

生國は五郎師と同じ堺、以前は昆布屋小唄の一つもやる處から俳優落語家仲間と交際しだしたのがぐれ初め素人が集つて芝居どつこ勸平ばかり卅六人の型でヤツタロ、一人り息子で有乍ら放蕩で龍神、乳守、大阪は新町、南地、堀江と羽根を伸す內借金も財產もすう

てんてん拙て何をするにも力仕事は出來ずさんざ金を使ふた揚句變な事も出來ず極道の性根は去らずそこは商人の上り何か樂をして金の儲かる事、よし一番藝人になつてヤレと以前ヒイキにして居た三友派の桂文屋の内で食客、例へば舊俳優が一萬有ると假定して九千九百九十倒さねば牛耳は取れず新派も其の通りなり何か頭數のすけない變つた物と目をつけたのが曾我の家を見付けて文屋の世話で加入明治卅九年六月廿三日同年九月に五郎十郎一滿虎と三月足らずで大幹部自用車もゆりて乘廻り幸福でしたが變化が有りまして東京淺草に走り目まぐるしい裡に十五年もすぎ一昨年元の古巣へ五郎師の元に歸らして貰いましたのですドオゾヨロシク御願申升。笑はすコツと云ても私しのは勢利普書を受取て考へるのです夫れを舞臺へ飛出してお客さんの顏を見れば考へて置たより以上出るのです自然の天祐と申ますか次から次ぎと出てくるのです頭がイ、と自分で思ひもせず又よくもなしくすぐりが重さならない事を一番考て置て人が右へ行けば左りとブンブン時計のネヂを忘れずに居れば私しはエ、と考へます。泣かす時は觀客席で一番早くハンカチ出した人にヒントを得て頭に其人をつかまへて置升。

五郎の素描

車輪の舞臺、玉の如く流れる汗、あのはち切れそうな熱演ぶり、これは舞臺人として五郎のよさである、何人もひとしく敬服して止まない所である、花の四月、と暑い七月、それにあわたゞしい歳末の大阪とこうして年三回の大阪公演の五郎劇、今年は特別で二月の中座へ何年ぶりかで出演したので四月が六月になつたが毎年は大阪の春の花も、暑い夏も、師走も五郎劇からと云ふべき、その興行的に最も不利な季節に大阪に歸つてくる五郎劇ではあるがそれでゐて、不思議な程に見物を呼んで連日大入滿員續きで打上げるのであるからこの目にみえぬ曾我の家の人氣は敬服にたへないものがある。

それは一つに五郎自身の努力の賜であり、五郎の豪さを物語るもので、人間としての五郎のよさ、舞臺弟一の彼その藝術家としての舞臺の裏に人間として完成された五郎の偉さに與つて力大なるものがある、人間曾我の家五郎の人格の片影を舞臺に見逃すことが出來ない、五郎劇の何時迄も限りない人氣の王座にあるのもむべなる哉である關西が誇るべき舞臺人であり、社會的に偉大な存在ではある、自分の仕事と云ふものに對し何人も五郎程の熱意と眞劍さがあればその成功こそ疑ふべくもない創立以來三十餘年今日の曾我の家が日本喜劇の王座にあるのも決して不思議ではないソコに五郎の血のにじむ樣な苦闘とたゆまざる努力の跡を見出す事を忘れてはならない、曾我の家の歴史こそ五郎の苦闘史である。

（酸甘郎）

野球

(A)

A君は勤勉なる郵便配達夫である。その朝も勇んで自家を出た。その日は又格別忙がしかつたので、夢中に受持區域を驅け廻つた。その折自分と同じ名前の手紙を見覺えのある家に投入した樣に憶つた。

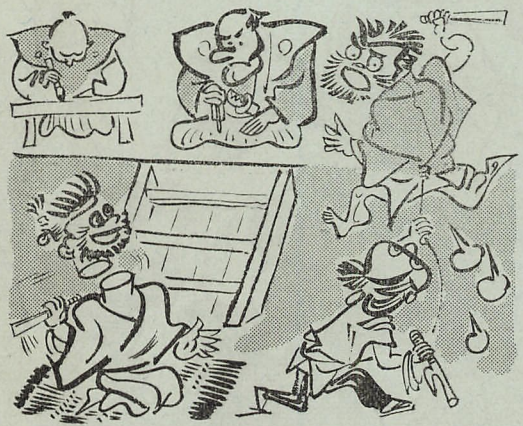
歸宅した彼は魂消て仕舞つた。愛妻が右手にハタキと左手にカフェの請求書を持つて、今にも嚙みつき相な顏をして居たからであつた。

(B)

名判決

◆正木彦◆

昔々或る所に、一人の兇惡な首斬り犯人が居て、役人達を日夜惱ました。が或る日刻々召し捕られて白洲で白狀した。そこで役人は〃その方には死刑を申し渡す處、神明なるにより、汝の首斬り藝を敎へて呉れまいか？　首尾よく出來たら褒美をとらすぞ〃と云つた。彼は得意になつて說明し、その場で實演したが。



(C)

素晴しい贈物

◆正木彦◆

餘り夫婦喧嘩がはげしいので、彼等の仲人は心配して、大型の〃姿見〃を彼等の家庭に寄贈した。

喜劇
俳優

生ひ立ちの記

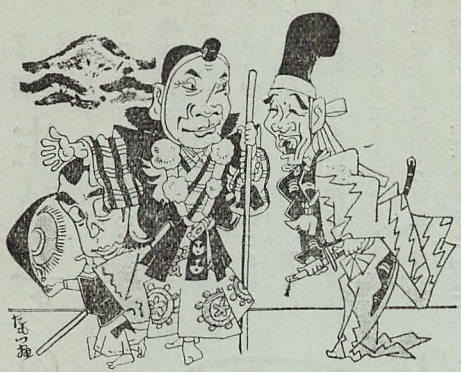
臨月の大鼓腹をかゝへた、彼の母は、寢床の中から債鬼の群れに云ふのだつた「何分亭主が先月家を出たつきりで、御覽の通り私がこの體だもんですから、今暫く……」債鬼の一人は荒々しくも、姙婦の煎餅蒲團を引きめくつて立去つた餘りの事に姙婦は逆上して產氣つき產み落したのが彼である。彼が生れると同時に彼の母は此の世の人ではなかつた其から小學の四年まで叔父夫婦の家に引きとられて生育した近所の人達は叔父夫婦の事を鬼夫婦だと陰口を叩いた小學四年生の秋に彼はその鬼夫婦の手で鍛冶屋の徒弟に年期で賣られた鍛冶屋の親父は大酒飲みでとても氣が荒く彼は生癪の絕へま

がなかつた或る雪の夜小さな風呂敷包を抱いて鍛冶屋から逃げ出し吹雪の町をさまよひ歩るいて、彼は到々或る芝居小屋の裏で氣を失つて倒れた氣がつくと彼は芝居小屋の大部屋で、座蒲團を枕に寢かされてゐたドサ廻りの新派劇で馬の足の生活がそれから初つた、兵隊檢査を濟せた頃彼は一座のお茶ぴい女優に戀をしたが肱鐵砲をまともに喰つて煩惱の末カルモチンを飲んで自殺をこゝろみたが到死量に至らず廿時間程で眼が覺めた……此間十五年經過……彼は三月程前に結婚した矢張り一座の女優であるそれも十日程前に妻は一座の二枚目と手に手を取つてかけ落をした短刀を懷中にして彼は妻の後を搜し廻つたが徒勞であつた……今机に向つて彼は家族劇の喜劇脚本を就筆してゐる「愉しき哉人生」三場

★酒井七馬★

笑路聲明

大槻たもつ



五郎軍に十吾軍が對立してお互に六月攻勢、ボーナス攻勢、不可ませんな、六月云ふと、すぐ賞與のことを聯想したりなんか。鼓浪嶼ならぬ歌舞伎座と中座で、前月は男の節句に相應しいチヤンバラの對立でしたが今月は一ツお笑の方で對陣しませうッてんで、この丸窓と櫓から、梅雨空を吹きとばさんばかしの張切ぶり「拜啓御無沙汰しましたが、僕は益々元氣です、僕のことは心配せず、悠々銃後の務を果して下さい。お父さんもお母さんも女房も丈夫で毎日笑顏で暮して頂けるのが僕にとつて一番樂しみです。安心して御國の爲にたゝかへます」と戰地の倅から夫から軍事郵便が屆く度に書いてあるので、メソ〳〵泣いたり要らぬ心配したりなんかせず朗かに笑つて銃後を守りませう。笑ふ門には福來たる、さうぢや〳〵と腰に枠の弓を張り、婆さん御座れ、嫁女も來い、道頓堀から千日前、十吾は銃後で五郎が良い、千日前から春霞、てなもんは過ぎた〳〵道頓ボーリよ。どうも雨降の自動車ぢやないが話の滑りすぎるのは良くないものです。一寸此處らで砂を撒いて、さて笑路聲明とは。どうも不可ません、本論に這入りかけた時分に既に紙數がない、エイツ滑りついでに……「あんまり男のべら〳〵しやべるのみつとも良いことおまへんなあ」腰を曲げて十吾はんから叱られたり「あまりしやべるのは決して良いとは思はんですネ」と眼をシバ〳〵させながら五郎はんからお小言を頂戴したり。……構ひません。頁の統制と口のガソリン切符が駄目になるまでは。實は私考へてるんですが、是非一度、五郎はんの辨慶と十吾はんの富樫で勸進帳を演つて貰ひたいと、不可ないでせうか、無理でせうか、誰です其處でニヤ〳〵笑つてるのは。そして義經を天外さんにお願ひして、もし宗家の方で勸進帳と云ふ題が不可ないのでしたら漫畫帳でもよろしい。何ッみんな出來ない相談だつて？、出來なければ見なくともよろしい諸君靜かに双の眼を閉ぢて今申上げた名舞臺を瞼に描いて見て下さい。時しも頃は如月の……から、陸奥の國へぞ下りける、迄、お臍が迷惑を感じるほど喜ばしきものがあるでありませう人生の笑路實に此處にありと申すも亦宜なるかな。敢へて此の聲明をなしたる所以であります。了りッ。

お七・中村芳子・大劇

與へられたる

食滿南北

『道頓堀』の題材は非常にむつかしいものでとても私には書けない、殊に近頃はどうしたのか何にも書けない、杵屋にせつかれて、お七と吉三の衣裳の下繪を大分澤山描いて、中で元祿にとつての麻型を入れた人形振はやゝ我意を得てゐる。ところが、管彩に描いたのが氣に入らないので描きなほしたこれは白地に銀の市松といふ帶をしめたいと云ふ芳子さんのあつらへがあつたので、それによくうつる衣裳をこしらへなければならない、私は本當に苦心して描いてみた。しかも裾に狂言もやうを入れたのが私の自慢だつた。出來あがる迄は、この狂言もやうがうまく調和するかどうかに頗る憂慮してゐた。ところが宣傳の衣裳附の寫眞をとる日に立會つたら、黑出の方の衣裳はいややさかい外のんみとなはれと芳子さんに拜まれたので何か見つくろつてゐるうちに、京都から染あがつてきた私がひろげて見るととても氣に入つたこれに白地の銀の市松の帶をしめたら聊かちばなれはするが大ひに看ばれがするだらうと聊自慢で、早速芳子さんに見せた。『よろしおまんな』とたつた一言だつた、私は何だかもつと褒めて貰らひたかつたので傍にゐた杵屋に『どうやゑゝやろ』といふとこの又杵屋が『フンマアゑゝな』と氣の無い返辭だ、私は高い處からつき落されたやうな氣になつた。第一染めて來た衣裳屋さんに濟まない氣がした。一人で『この狂言もやうがよかつたな』と獨白ですましてみても、何だかもの足りない。私はこんな愚痴な男ではなかつた筈だがと思ひかへした。私は何でも近くに死ぬらしいイラ〳〵して氣が短かくなつてゐる、誰もみてゐなかつたらヅタ〳〵にこの衣裳をひきさいてポンとビルヂングの何階からか泥の大地へ捨てたくなつた。しかし大分に高くついてゐるらしい。そんな事をすると百圓札を切りきざんだ人と一緒にされやうかと思ふて飛出して長しろへ行つたら山口艸樂畵伯がのんでゐた、私は少し眼をわづらつてゐたので酒をやめてゐたが、相手がよかつた、イヤ惡かつた、どつちでもよいがせめてもとビールのつめたいのをグツとのんだ、さうして『裾へ狂言もやうを置いてやつたんや』と出しぬけにいふたら、畵伯は『ソラ何の事や?』と云はれて氣がついて『ハヽヽヽヽ』と笑つてしまつた。事件はこれだけではあるが、これが遺言になりはしまいか、辭世にしてはちと愚痴が長すぎたかもしれない。

市川左團次一座・中村魁車特別出演

神戸松竹劇場

狂言解説

（六月興行）

此座も狂言五種、並べ方はみどりですが、何よりも優秀な作品揃ひなのは流石先覺者左團次のシバキです。第一の『色手綱戀の關札』は櫻田治助の物を川尻氏が改修されたもので清元地の輕い振事ですが、大間な古風な歌舞伎味を狙つてあります。廣袖の着付羽織、紫の置頭巾といふ拵への義經が田舍馬に横乘りして、銀の延べ煙管を張肘で構へてゐる、振袖を片肌脱ぎ、頬被りといふ女馬士の拵へで秀衡の娘忍の前が馬の手綱を捉つてゐる、――かういふ畫面の見得からこの振事は始まるので、總て繪畫的な趣を多分に持つてゐる一ト幕であります。

第二の『大杯』は丸橋忠彌や血達磨と共に高嶋屋のお家藝であることは申すまでもありません。初演は明治十四年五月の猿若座、默阿彌が講釋から先代の爲の中幕物として脚色したので圓熟の境に入つた默阿彌の筆はすばらしい冴えを見せてをります。剛勇で大酒の武士二人が圖らず出會つての戰物語、五合、七合五勺、一升入りの三組盃を互に鯨飲し合ふなど上戸黨ならずとも痛快至極であります。また女性を一人も出さず、その代りに美しい小姓二人を色どりに出したのも、作者の味噌であつたやうに聞いてゐます。それよりも、二人ながら剛勇の士ではあるが、井伊掃部頭を都會人らしく、原方助實は馬場三郎兵衛を野人肌に書いて權十郎と左團次との藝格にそれぞれ嵌め込んであるのは今更ながら敬服します。前にも述べた通りこれは講釋種ですが、この實説とかいふ方も數年前長谷川伸氏に依つて脚色されてありますす『阿閉掃部と青木新兵衛』（一幕三場）

がそれでこれは天正十一年の賤ヶ岳、井伊と馬場の大阪夏の陣より大分時代が前になつてゐます。兎も角もこの權十郎・左團次の『大盃』は甚しく評判を取つたもので、昔の聲色遣ひは定まつたやうにこれをやつたものです。

第三の『累』（色彩間刈豆）は清元としては化政度の代表曲ですが、踊としてはあまり顧みられず、踊の師匠が傳へてゐたに過ぎませんでした。それを大正九年十二月の歌舞伎座に梅幸のかさね、羽左衛門の與右衛門で上演して大々的の好評を博して以來、屢々繰返されることになり、なほ樣々の俳優の組合せで演じられてゐるのは皆樣既に御承知のことでありませう。なほ大正十四年七月の市村座で今の菊五郎、亡くなつた勘彌等によつて『法懸松成田利劍』の原作通り演じられ、何よりも珍らしいのが評判になりました。この累殺しは二番目の序幕に當るのであります。作詞は松井幸三、作曲は初代延壽太夫の妻女で、道行やへ入れぼくろ〳〵の年忘れの騷ぎ唄、〳〵夜や寒きの地唄ぶりなど愛誦の箇處も多く、舞臺は濃艶と、凄慘と、所作とシバキと交錯する點に興味があります。

第四の故小山內氏作『西山物語』は左團次中心に書卸されただけに同優獨特のもので、杏花十種に推奬されたと聞いてゐます。執筆されたのは大正十三年度ですが、上演は昭和三年四月の歌舞伎座でありました。初演は惣治が壽美藏、團次が猿之助、かへが松蔦、右內が龜藏、母は源之助でいづれも役々に嵌つて好評、二度目の四年六月の帝劇の時も、母は宗十郎、かへが訥升右內が田之助で、これも同じく好評で處に興味がある譯で、白拍子出の籠姫靜の鷹揚な振と、若い武士忠信の颯爽たる振との對比に變化もあり妙味もあります。而も忠信が變化であるだけに複雜になります。最初は常磐津地で、後には富本にも清元にも採られ、今は清元と竹本の掛合が定式のやうになつてをります。今度は梅玉の靜を向うに廻して吉右衛門が珍らしくこの忠信を附き合ひますが、これはどちらも珍品です。（ほのぼ）

鯉の瀧登

隅田川より御厩上の鯉を納めんと、兩國橋を通りしが、此鯉飛び出で川へ入りたり。持人うろたへ立さわげは、冷水賣これを見て、いかなる事と尋ぬれば、持人始終を咄し、涙を流せは、少しも氣遣ひあるなおれが取つて進上と、欄干の上より、ひや水をさら〳〵とこぼしながら、瀧々々。

【壽々葉羅井より】

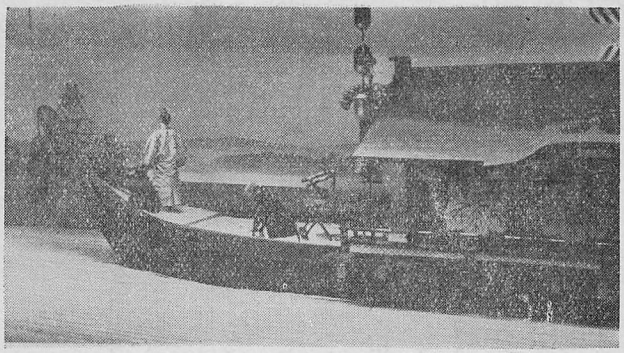
東西合同大歌舞伎

狂言解說

六月・宮都・南座

今度の狂言五種の中、二つ默阿彌の作が出てゐます。どちらも講釋種ですが、翁の達者な脚色ぶりを知るに足るもので、それだけでも興味はあります。その一つが第三の『實錄千代萩』で、これは講釋の『伊達騷動』を脚色したので、實錄といつても正史ではありません。が、兎も角も六幕十五場といふ大物です。本當の外題は『早苗鳥伊達聞書』、水戸街道で神並三左衛門と闘口彌太郎の二人が、相撲の手と柔術の立廻りなど目新しく、評判になつたものです。初演は明治九年六月の新富座で、役者は今の宗十郎の養父の助高屋高助の淺岡、五代目(菊五郎)の小十郎先代芝翫の鐵之助等でしたが、此時の千代松が今の宗十郎、當時源平で、大いに見物を泣かしたさうです。『白川主殿の子でござる』以下の小十郎の長い獨臺詞も、吉右衛門の名調子で今度は一層面白く聽かれることゝ思ひます。

次の『河内山』(天衣紛上野初花)も申すまでもなく默阿彌翁の作、而も圓熟時代の名作で、白浪物に得意な泥棒伯圓の讀物『天保六花撰』を劇化したのであります。明治十四年三月の新富座が初演で、九代目(團十郎)の河内山宗俊、五代目(菊五郎)の直侍、家橘の松江出雲守、中村宗十郎の高木小左衛門、半四郎の浪路、小團次の數馬等、實に豪華版の大芝居でありました。なほ役々の中に梅五郎(役の松助)の丈賀清十郎(後の源之助)の千代川があるのも懷かしいことであります。今度は七幕十五場の中、河内山を中心とした部分だけでありますが、その人物はこの二幕の中にも躍動してをります。善人ではないが洒落氣もあり、愛嬌もあり



二條城清正舞臺面

義理人情も呑込んでゐる處が今もなほ見物に迎へられるので、三曲の合方で『悪に強きは善にもと……』以下、松江の大玄關で尻を捲つての獨臺詞など眞に痛快で、これも臺詞にかけては第一人者である吉右衛門だけに人いに期待されます。

第一へ戻つて、吉田絃二郎氏の『二條城の清正』は既に昭和十年東京歌舞伎座の初春芝居に大好評を得、續いて京都南座、大阪歌舞伎座にも上演されてをりますが幾度觀ても興味深く、秀山十種と銘打つただけのことはあります。遺子秀頼を我子のやうに慈み、太閤下賜の短刀を懐中して必死の覺悟を以て守護の役に自ら任じてゐる清正は眞面目な正直一途な吉右衛門その人の性格ともピッタリ合致してゐます。殊に大詰の、夜明近い淀川を急ぐ御座船に秀頼と對座して、涙ながらに感慨を述べる情景は、眞に詩趣に富んでをります。

第二の所作事『汐くみ』は源を紀せば能から生れてゐるのですが、能のやうな硬さは無く、全く歌舞伎の舞踊らしく崩けてをり、品もあり色氣もあつて、日本舞踊の代表的なものと言つていゝでせう。松風村雨の傳說から採つた踊はかなり古いもので、後に『汐くみ』の條だけが獨立したのであります。文章も謠曲の文句を巧く按排してあり、從つて振も高雅な振と艶麗な振とが交錯してゐます。併し何といつても能と同じく、『汐汲み』の段がやはり見どこでありませう。

第五も所作で、これは『千本櫻』の道行ですが、前の『汐汲み』に比べると院本から出てゐるだけに一層劇的なありました。原作は德川期(明和頃)の小說『西山物語』で、これから暗示を得て創作されたので、人間の心の表現を主眼とされてゐます。スタイリストと言はれる氏得意の形式に新味があり臺詞に表現派の影響を受けてゐられるのを面白く思ひます。(ほのほ)

半歳の回顧

篠山吟葉

今年上半期の大阪の芝居は可なり賑やかであつた。先づ初春の中座は吉例復古の大歌舞伎となつて、歳末には煤飯の祝ひも式の如く、元旦より花々しく蓋をけて、一番目丹諺蔵物の『小笠原流禮忠孝』を大西利夫氏が筆を入れて十二場の通し狂言、第二は清元の所作事で『子守』と『卯の花、第三は郷田憙氏の『鶴ケ城』、第四は大森痴雪氏の『小さん金五郎』、切が竹本と常磐津で『正月縁起』と『田植神事』、俳優は延若・梅玉・市蔵・魁車・壽三郎・長三郎・霞仙・吉三郎等關西歌舞伎を網羅した大一座で、殊に『小笠原』は珍らしく、延若の岡田良助、魁車の隼人狐が車輪に勤めて大受け、『小さん金五郎』では延若の金五、梅玉の小さんが上方情緒を見せて、これまた大當り大評判であつた。

初春を家庭劇で花々しく迎へた歌舞伎の二月は、鴈治郎追慕興行として成駒屋一門に、前月中座出演の關西歌舞伎それに東京から宗十郎・猿之助・鶴之助を加へて、『義經千本櫻』の道行・鮨屋・川連館に、次が食滿南北氏の追善狂言『偲月佛會我』、中幕が猿之助の辨慶、宗十郎の富樫で『勸進帳』、二番目が郷田憙氏の『歌しぐれ』、切が宗十郎の『文屋と喜撰』、一番目の道行から文樂の太夫三味線六挺六枚、大道具は花の吉野山を三ばい返しで見せるなど、歌舞伎座ならではの豪華な舞臺に見物と呀といはせた。

序幕では扇雀の靜、猿之助の忠信を相手に些かの危氣なく踊り、猿之助また幕切れに狐火を使つた新工夫を見せたが、鮨屋では延若の權太、これは東西無比の技倆を見せて見物の絶讃する所であつた。

翌月の歌舞伎座は、東京新派の河合・喜多村・花柳・井上等の合同一座が乗込み、第一が川口松太郎氏の『乗合馬車』、第二が川村花菱氏の『三日の客』、第三が中間演劇の『焔の人』で、第四が鏡花物で花柳の出しもの『白鷺』六幕十場であつた。花柳のお篠、すつきりとして藝者らし

い藝者を見せたが、一般の客は『三日の客』の川柳味を喜んだやうであつた。

さて四月の歌舞伎座へは、大阪では始めての菊五郎・吉右衛門を迎へて素晴らしい大當り。狂言は序幕に三津五郎の『暫』次が菊の松王、吉の源藏で寺子屋、第三が吉の高時、第四が菊の『道成寺』、これは松永和風・望月太左衛門・柏伊三郎の出演で、吉の押戻しも東京の儘であつた。『道成寺』と『寺子屋』は東京の歌舞伎座で、いづれも二ケ月ぶツ通しの當り狂言。『道成寺』は大阪の見物も議論なく喝采であつたが、『正しい演出で無駄が無く、上方風の様式的に反し、江戸前の現實的解釋の成功』と東京の新聞にたゝへられた『寺子屋』は、大阪の客には全滿點とは行かないやうであつた。殊にいろは送りの省略なども不得心の人があつたやうである。

二番目狂言には、大阪で珍しい『加賀鳶』を据えて、これは相當に受け、切は友右衛門、男女藏の『五條橋』と、三津五郎の『芝翫奴』で、賑やかな狂言揃へであつたが、客も賑やかに詰かけて、一等席税金とも九圓何十錢の料金をビクともせぬ盛況であつた。

二月に曾我廼家、三月に家庭劇であつた中座は、この月は延若・魁車・市藏・長三郎・壽三郎の關西歌舞伎に宗十郎等の東京方を加へて『假名手本忠臣藏』を大序より八段目、討入をつけて全十五場の通し狂言、切は『保名』と『花見踊』であつた。

この忠臣藏、菊吉の歌舞伎座を向ふに廻しての勇戰奮闘めざましく、大序鶴ケ岡より總て本格通りに、直義の還御まで見せて客を得心させ、由良之助の延若も城渡しから、居所變りで與市兵衛、定九郎に引拔いて、名人小團次が江戸お目見得の型で行くなど、一座懸命の努力に、個々の評は兎も角も、芝居は歌舞伎座に劣らぬ大當り、花時の浪華の春は、この兩座で花も物かはの賑ひであつた。

五月は中座に前進座、出し物は『若き啄木』『勸進帳』『傳八戀の引窓』の三種であつたが、意外に『若き啄木』が好評であつた。歌舞伎座は新國劇で、『坂本龍馬』『日本の合奏』『沼津兵學校』をお目見得に出し、二の替りは二十日から『日本の合奏』だけを殘して『齋藤大使』と越後獅子』で二十五日まで打續け、兩座とも前月の絢爛たる歌舞伎に引更へて、この月は生氣潑剌たる新劇團であ

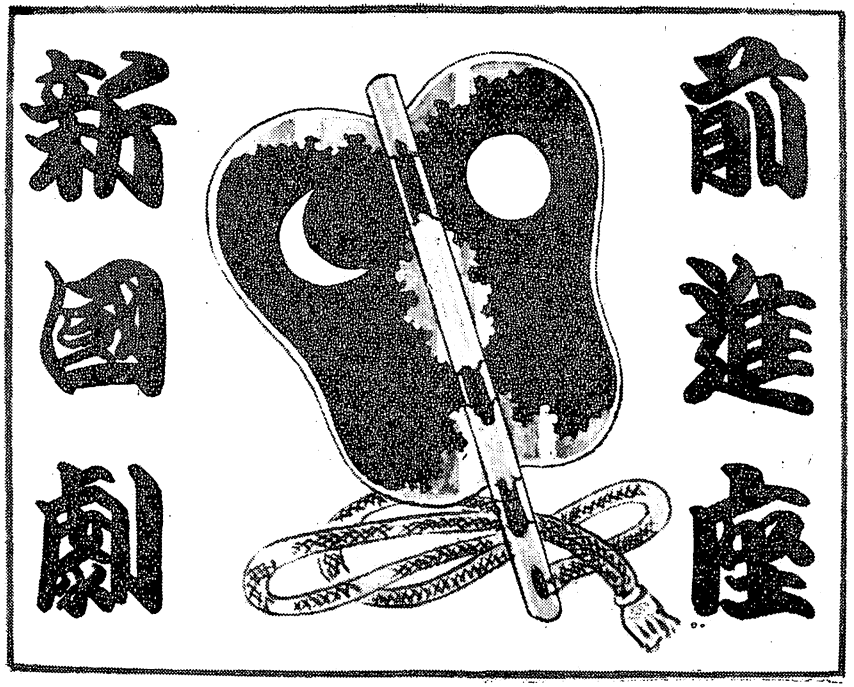
づたが、双方ともに相當の成績であつた。

さて六月は別項案内に在る通り、兩座とも又々揃つて曾我廼家と家庭劇、いづれ劣らぬ宣傳戰につとめて、爆笑又爆笑、大入り大當りの笑ひ顏を期待してゐる。

角座は一月より新舊合同劇の打續けで、三月だけは大江美智子の追善として鈴鳳劇で二替りを興行し、四月五月は依然合同劇で五月一ぱい打納め、六月は新興キネマ新設の演藝部が花々しく旗擧げ興行、これには吉本と圓滿和解が成つたワカナ一郎を始め漫才花形連が颯爽として登場するは別項案内の通り。

浪花座は四月から籠寅興行部の經營となつて、百々之助勝太郎、伏見澄子の實演を順次に登場、これに漫才、映畫を加へて毎回賑やかな當り續け、北野劇場へはこの春、蓑助もしほの來演で勸進帳なぞを上演した事もあり、文樂座は毎月人形淨瑠璃の本格興行を打つゞけて、大阪の上半季は各座とも相當以上の成績で賑はつたのは事實である。

× × ×



（劇評）

前進座を見て

升屋治三郎

前進座も新興劇團として立派に發達した。今日の日本の劇壇に於て確固たる地盤を占め獨特の色彩を有する青年俳優のグループとして有數のものであると云ふ事は認められる、處で前進座は日本の劇壇に如何なる文化的な意義のあるものを投じたか。そこに此劇團の價値が評價されるべきである。否今後の此劇團の使命も茲にある。

前進座は今日一應は完成の域に到達したかの樣に思はれるがそこに惱みがあるのではなからうか。今日重要な轉換點に達して居るのではあるまいか。映畫への進出もその現れの一つであらう、又その映畫の主題が幾度も取換えられ或は又中止になる等いろ〳〵の惱みが現はれてゐる。今度の『若き啄木』も亦この惱みの現はれではあるまいか。

『若き啄木』――惱める天才の縮圖であるかの樣な啄木の短かい然し火の出る樣な生涯は戯曲のよきテーマであるそれが嘗て此一座が好評を博した『江戸城明渡し』の作者

に依つて戯曲化されたものを取上げた事はもつともな事である。然し此戯曲がはたして此一座に打つて付けのものであつたかどうか。徹頭徹尾寫實的に演ぜらるべき此劇が處處にキマリがありお芝居があつては觀客は不協和音を聞かざるを得ない。いやその外に口惜しくも語らざるを得ない事は大阪の中座の前進座の客の大半は――恐らく八〇パアセントは詩人啄木とは無縁の衆生であるが爲に門徒衆に甚督受難劇を見せた程の感動すらない事が折角の此劇の好果をどれ程遞減したかしれない。

甌右衛門の啄木は扮裝なり科白に相當研究もせられた苦心の程は察しられるが作品を通じて想像される啄木より肉體的にずつと偉丈夫に見えた事は甚だ遺憾だつた。毛利菊枝の母親かつにしろ、京町みち代の『山本先生』にしろ女優連はいづれも好演技を示し、進藏の田島校長、鶴藏の古山訓導にしろ著名な人でない爲に我々に何等のイメエジがないので戯曲の中の人物としては稱贊すべき出來だつた。

さて『勸進帳』だがすでに此一座の勸進帳の藝評に就てはすでに定評があり今更細評を繰返す必要は認めないが、結論として長十郎の辨慶は柄に於て充分の素質があるが未熟の域を脱してゐないといふ事になる、自分は「助六」『毛抜』『鳴神』に於て此一座が示した江戸荒事歌舞伎の大まかな繪畫美には多大の稱讃を送るものだが、も一歩進んで『象引』『解脱』『鎌髭』等の創作？歌舞伎十八番物を上演する事を慫慂する、これ等の主人公は必ず長十郎の柄に合ひ又前進座の人々の藝風にも合ふと思ふが如何。

『傳八戀の引窓』に於ては芳三郎の男役としての新しい境地を示したといふだけで寧ろ觀客は甌右衛門の石松のアクロバチツクな好技に陶醉した。

こう云ふ風に見て來ると前進座の將來に就ては種々の事が暗示されるが自分は何よりも先づ前進座に對しては往年左團次が岡本綺堂氏と取組んで大正期に於て新歌舞伎を生んだ如く前進座も亦昭和の歌舞伎樹立の爲に驀進することこそ唯一の使命である事を强調する。（十四―五―廿一）

「新國劇」を觀る

（劇評）

菱田正男

新國劇が五月の大阪歌舞伎座で『坂本龍馬』と『日本の

合奏』及び『沼津兵學校』の三作を上演した。

第一の『坂本龍馬』は眞山青果氏の作から、寺田屋騷動と、龍馬と中岡愼太郎が寓居で刺客に殺される二場だけを見せてゐる、この二場だけでは作者も不滿だらうし、見物も感銘が薄く、從がつて島田の龍馬と、辰巳の中岡も演り榮えがせない。

第二の高田保氏作の『日本の合奏』は近頃好もしい作である、いつぞやラヂオで放送もしたが、纏まつたものを見ると更に傑れたものである。

事變以來砲煙彈雨實戰宛らの幾多の軍事劇を見たが、近頃ではそうした際物的野心から脱し、それでゐて時局と不即不離のものを上演しやうといふ意圖はどの劇團もの覘ひらしい、火藥をふんだんに使ふ煙硝臭い舞臺よりも、靜かなうちにしみ〳〵時局に對する認識を强めさせるものゝ方が、より感銘が深い。

『日本の合奏』など、その點をよく出してゐる、大陸や陸軍病院などを背景に、構想も自由奔放であり、更に序幕に見る鄕土色など捨て難いものがある、愛兒が護國の華と散つた木下一家と、やくざ者の兄敬太郎、それに酌婦をしながらも操を立て通す妻のおきく、戰傷の身で兄と嫂を思ふ弟弘――この相川一家を中心に描く悲喜交々の人情は韓々として胸に迫り、第二場の『月下の橋上』や、大詰の演奏會の場など非常な感激と興奮を覺へる、けだし近來の觀物と謂へやう、辰巳の敬太郎、長島のおきく、秋月の弘小川(虎)の宗吉など、いづれも適り役でよく演つてゐるし久松が病氣不參で宗吉母、おみのを山路が演つてゐるが、久松そつくりの臺詞廻しと演技で大いに効果をあげてゐる。

第三の『沼津兵學校』は八木隆一郎氏の最初の時代劇、明治の變革期における學生生活の描寫が面白く、武士の倅正邦と、町人出の俊平の二人の相剋を中心にして、はげしい時の流れに揉まれつゝも新日本建設へ合流する人々の姿をよく出してゐる、辰巳の正邦、島田の俊平とも樂々演つてをり、俊平を彩る長島のおひでと、二葉の鶴世もわるくない。

こんどの演し物が三つとも堅いので大衆的でなかつた損はあるが、これも時局柄止むを得まい。

二條城の清正の初演

川尻清譚

吉田絃二郎氏作る處の、『二條城の清正』劇が、初演當時既に空前の好評を克ち得て、『秀山十種』の第一に加えられた事は、偏に脚本の傑作であつた事は勿論、併せて主演者吉右衛門丈の妙技が、それに伴つて完全を遂げたのは言ふ迄もない次第乍ら、其後も上演の都度到る所必ず絶讃を博してゐる事に就て、爰に此劇が世に出たまでの道筋を少しばかりお話をして見ませう。

事の起りは、去る昭和七年の八月、故三菱總務理事の、木村久壽彌太氏より中村吉右衛門丈へ、加藤清正公所持の懐刀の寫しである、長船次郎左衛門勝光作の、銘刀一口を贈られたのに始まつてゐます。其授與式のあつた晩、木村氏は改めて清正公の德を讃えられ、吉右衛門丈に向つて曰く、丈が之れを帶びて舞臺に立つの時、丈の意氣自ら昂るものありて、大衆感化の力の加はるものあらば、徒に私藏するの愚に勝れるを思ひて贈呈す、願くばいよ〳〵故公の英姿を、長く舞臺に傳へられたしと望まれ、同時に此席に列した松竹社長の大谷竹次郎氏よりも、大和魂の精華が俳優の熱誠と才技とに依つて、更に舞臺上に活躍發揮されん事を希望した譯で、豫て清正公の忠勇義烈に私淑してゐた吉右衛門丈に於ても、頗る感激に滿ちた挨拶を述べられたのでありました。

所で不取敢、右の懐刀にまつはる顚末を劇化上演の運びとなつた砌、吉田絃二郎氏より頂戴した梗概が、最も其題材に適した物であつた爲、早速吉田先生のお宅へ參上して是が完成をお願ひしたのが私の役目であつたので、一入當時の有樣を目の前に思出して、その小話の二つ三つを話して見ます。

爰に一つの奇緣とも言ふべき事は、二條城の清正劇の作者、即ち吉田絃二郎氏所藏の愛刀があつて、是が同じく備

前長船勝光の作である所から、計らずも長刀と短刀と親子の對面をさせたのも何か深い因縁のやうに思はれ、尙吉田先生は、此脚本を書上げられた翌日、前からの約束で九州福岡へ講演旅行に出立されましたが、颱風に土砂降りの雨の中を熊本へ到着の時、すぐ頭に浮んだのが本妙寺の清正公のお墓の事で、折から夜に入つたのにも拘らず、講演前の時間を利用して自動車を走らせ、猛雨に身を濡られしてお詣りをされたと云ふ事、更に歸途は鹿兒島より楫宿の方へ數里離れた谷山町に行つて、秀賴の墓にまでお詣りなされたのは、誠に一奇でもあり偶然でもあり、又思出深い事でもあつたと、吉田先生が御歸京後、稽古場へ見えた時のお話でした。

是も其當時の事、丁度『二條城の清正』劇の開場以前、松竹の大谷社長が、毎月の例として關西へ出掛けられた折太秦の撮影所に用事があつて、自動車を飛ばして行つた所丁度右の道へ曲らうとする途端、車の前に立現はれた一警官が停車を命じ、運轉手に向つて、左の道へフルスピードで走れとの命令、車内の大谷氏は、別に反則の覺えもなくどうした譯かと思つてゐると、警官は頻と怒鳴り乍ら疾走を續けさせる、見ると前方に一臺の自動車が全力を出してゐたが、大谷氏の自動車が漸くそれに追付いた時、警官はステップを飛下りて前の車に乘移つた。跡で運轉手の話を聞くと、先きの自動車に反則があつたのを追跡した事とは分つたが、お蔭で大谷社長の車はずつと引返さなければならず、其隣間車窓を覗くと大きな城が見えたので。アレは何處の城かね。と聞くと、運轉手が。ヘイ二條城でございます、飛んだ所まで來て了つて相濟みませんと詫びるのをイヤいゝ所へ連れて來てくれたと、態々車を下りて打眺め〳〵。お蔭で舞臺裝置の參考になつたと云はれた挿話もありました。

舞臺裝置と云へば、是にも亦奇縁が伴つて、前々から吉田絃二郎氏と親交のある安田靱彦畫伯は、いつか一度吉田さんの書いた脚本に舞臺裝置をしませうとの約束が、『二條城の清正』劇の舞臺に實現して、豪華の舞臺飾り、絢爛の衣裳小道具は、すべて靱彦氏の精格な史料に成り、配色の妙に善美を極めて、全く見物の目を驚かした事は、今回も同樣其原圖に基いて作られたもので、舞臺美術の模範として、悉くの觀客が讃美の聲を擧げるのが當然であります

扨最後に主演者の吉右衛門丈は、前にも述べた如く清正公の崇拜者であり、且は豫て希つてゐた脚本を得る喜びに依つて、廿五日間の興行中精進潔齋をして、初演の時には日々自ら濱町の清正堂へ參拜を怠らず、常住座臥に至る迄、全部清正公に成切つた有樣で、或夜の夢枕に、清正公が白馬に打跨つて立たれた御姿を拜み、序幕居城の場面にて、秀賴樣御上洛御決定の事を聞いて打喜こぶ所にて、思はず床の間に掛けてある、『南無妙法蓮華經』の掛字の前に禮拜をする仕科のお告げを得たなど、是も偏に奇瑞の御守護と、興行中は樂屋に其幅を掛け、身を清めて手づからお供物を捧げ、ます〳〵祈念を怠らぬ熱心さには、周圍の者も吃驚する位の有樣、當興行にも勿論其通りを實行の筈されば吉右衛門丈の眞劍さには、清正公の方でも乘移らずにはゐられないのかも知れません。

最後に此劇の上演に際しては、いつも座中が一心同體の如く、協力一致に立働き、大詰の淀川を下る御座船の場面にしても、螢の飛ぶ闇の中の短筒一發から、段々に夜の明けて來る始めより、遙に大阪城の御天守が見えて時鳥が鳴くと云ふ幕切れまで、舞臺効果の全員總掛りで、船の進行を見せる爲の船先きの垂れ糸の搖れ、乃至は浪の走りの照明、松火の光りを增す赤色の照明、擬音としては船の方向を替へる櫓の音、終りに近く櫓聲を殖す船子の掛聲等、舞臺裏には數え盡くせない苦心が拂はれてゐます、殊に船が浪を切つて行く音を出すのに、初めの程は大盥へ本水を張つて、其水の上に板を浮べ動かしても見ましたが、近くはともかく、遠くへ迄屆かないので、笹の葉で水を動かす音響を試みたり、更に筵を笹で撫でて水音に聞かせて見たり苦心の有たけを盡くした結果、遂に昔からある鳴物の『連』の大太鼓を打たして、是が一番によい成績を擧げたのなど吉右衛門丈も大に感心して、矢つ張昔の物にはいゝ所がありますと、しみ〴〵さう云つてゐた事もありました。

まだ〳〵二條城門外での清正が、高股立を取つて太い青竹を突き、『還御』の一聲と共に、時の太鼓を打たして花道へ入るまでの苦心談など、お話をすれば面白い事も澤山ありますが、原稿〆切の爲飛航便で發送の爲、時間に迫られまして、今回はほんの申譯ばかりを書くの通り、此次ぎには何か興味のあるものを差出したく存じて居ります。

道頓堀だより

（六月興行一覽）編輯部

六月の大阪劇壇は期せずして笑ひの演藝陣が布かれた。歌舞伎座の五郎劇、中座の家庭劇喜劇の對抗戰があるかと思ふと、角座は新設の新興演藝部披露興行の漫才漫藝、浪花座の籠寅演藝もそれに應戰するといふ有樣である。その代りには京都南座へ吉右衛門、梅玉等の東西大歌舞伎で中村會、神戸松劇へ左團次一座など賑やかに西下する。

歌舞伎座

六月一日初日で曾我廼家五郎劇が曾我祭記念興行。出し物は第一「生めよ殖せよ」一場第二「エプロン」一場第三「曾我祭」五景第四「故郷の土」一場第五「鴨川千鳥」二場。日曜マチネーの狂言は第一「手品の種」二場第二「バケツの水」一場第三「三つの世相」一場第四「隣り合せ」二場。

中座

松竹家庭劇の歸演、一日初日の二回開演である。第一「ノー、レンズ」二場第二「拾ふた弗入」三場第三小林宗吉作「花嫁大陸へ來る」三景第四「顔の疵」二場第五「最後の一撃」二場。

浪花座

一日初日で籠寅演藝部のビックメンバー。伏見澄子の實演「日本晴土俵入」五場と爆笑名人大會、江戸生粹家元豊年齋梅坊主社中、動物壓帶模寫砂川政子國春、笑ひのリズムトウロクショウ、漫才界の麒麟兒九條藝兒西條凡兒、唄と浪曲大津お萬出演。

角座

一日初日三回開演で、例の問題を圓滿解決した新興演藝部の披露興行。音曲漫才ワカ子春雨、モダンマンザイスイングジャズ子、時事漫才とリミ染丸、ハリキリ漫才喜久三君勇、新興自慢ラツキイセプン、ミユジカルコメディハット、ボンボンズ、舞踏漫才奴喜蝶、演藝界の人氣者日佐丸ラツパ、漫才のNO一ワカナ一郎、あきれたボーイズショウ「どうだす狂騒曲」三部作、特別出演コロンビア專屬豆千代。

大阪劇場

一日より大船「新女性問答」京都「若旦那こゝに在り」の映畫と共に、新企劃の歌舞伎レヴュー「お七と吉三」景、出演者は中村芳子、實川延三郎、中村鴈之助、市川九團次、嵐吉三郎に松竹女歌劇新進組、尙源太夫、文太夫、宮太夫、駒太夫三味線吉左八造團伊三廣二吉季叶太郎等文樂座連も特別出演し、優艶なお七吉三の戀物語をレヴュー化した新形式のものであつた。

文樂座

一日初日の本格興行、第一「彦山權現誓助劍」瓢箪棚、六助住家（文字太夫喜代之助、古靱太夫重造）第二「增補大江山」戾橋（扇柳實は鬼女鍛太夫、渡邊綱大隅太夫新左衛門廣助友造友三郎等）第三「名筆吃又平」將監閑居・伊勢太夫仙糸、津太夫綱造寛市・第四「傾城阿波鳴戸」十郎兵衛内・さの太夫、常子太夫、隅若太夫清友駒太夫清二郎、相生太夫、道八呂太夫寛治郎織太夫團六・第五「壇浦兜軍記」阿古屋琴責・阿古屋伊達太夫、重忠和泉太夫、岩永相生太夫、呂太夫、織太夫、播澤長尾太夫、富太夫、竹太夫友衛門新太夫、清友吉藏・人形配役は娘お園女房おとくお弓・文五郎・青侍扇折若菜阿古屋・紋十郎・京極内匠重忠・玉藏・毛谷村六助吃又平十郎兵衛・榮三・等である。

芝居の裏と表を語る座談會

松竹の劇壇制覇以前より、大阪の歌舞伎王國に生活し、名作者勝諺藏の高弟として、少年期より幕内に親しみ、近世の名優中村宗十郎、市川齋入、片岡仁左衛門、中村鴈治郎等々の寵遇を得た松竹の奥役大川澱江氏に芝居道の種々相を訊くべく、同志相寄り毎月例會を開く事になつた。その第一回を五月十五日、四ツ橋佐々木旅館に開いた。夕刊大阪新聞主筆鷲谷武氏の御好意に依り速記を執つて頂いたのがこの記事である。集まる人——

（順次不同）

大川澱江氏
食満南北氏
鷲谷武氏
杵屋正一郎氏
篠山吟葉氏
田中牛耳郎氏
鳥江銕也

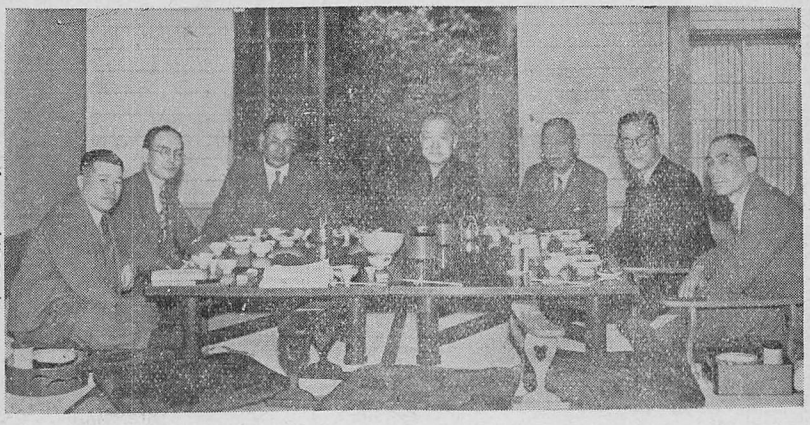
鷲谷——では、そのまゝお話を進めて昔の思出——芝居の裏と表といつた話を一つお願ひします。

食満——團十郎がカッポレを踊つたといふて、喧しかつたことがあるが、今日からいへば、當時のアキレタボーイズだ。

大川——右團治は、隨分苦勞した、子供の時分には丁稚奉公にやられたことがある。

鷲谷——それは、またどういふわけですか。

大川——右團治の產れたところは立慶町——今の櫓町——に、恰度中の芝居の横側にゝつるやゝといふ、いろは茶屋があつた、その茶屋の娘、お竹に小團次——初は米十郎といふてゐたが、聟養子に入つて產れた子供が右團治で幼名は福太郎といつてゐた。だがこの米十郎は、どうもうだつが上らない。大阪では芽が吹かないといふので、妻子を離緣して、東京に出て、小團次となつた優だが、その別れるとき、福太郎には役者などにするなと云つたといふことで、お竹はその言葉を守つて、物心つくと客先であつた堺筋の象治郎といふ唐物屋へ丁稚奉公に出されたのだが、仕事を云付けられても、ろくずつぽしない、芝居の眞似ばかりして仕樣がないといふので、實家に呼戻された、なるほど芝居が好きなら仕方がないといふのでそのころ七代目團十郎、



（右より田中、杵屋、大川、食満、篠山、鳥江、鷲谷の諸氏）

後の海老藏が、恰度大阪に居つた弟子の小團次の悴といふので、自分が世話をして、若太夫座へ福太郎を連れて出た、その後右團治と改名させた、その評判が東京へ知れて、父小團次より上京せよとの迎へが來たので、母のお竹を連れて上京して行つたのだが、小團次の後妻との軋轢の絶間がない、この後妻といふのは歌六の娘だが、事毎に邪魔もの扱ひにして辛く當るので、母を置いてはいけぬといふて、右團次は母を連れて大阪へ戻つて來た、しかしその道中の雲助が恐い、役者とみればヒドイことをするので、家代々の門徒だが、千願寺詣に身をやつして、東海道を下つて來たが、途中痲疹に罹つたりして、八軒屋に上つたときは、たつた二十二錢のお金しか殘つてゐなかつたといふ、隨分慘目さであつた、さういつた苦勞して來た優に似合はず、多見藏に老ぼれといつたといふので、右團治は生意氣だといふので、人氣を墮して悄氣返つたことがある。

鷲谷――老ぼれとは、どうしていつたのです。

大川――その經緯は、角の芝居で「長吉長五郎」の狂言をやつたことがあるその台詞の中の「あのこゝな、すでつちめ」といふところで、返す詞に「何をぬかす、この老ぼれ」と云へと、多美藏が、右團治にいはせたのだ、右團治にすれば、座頭が舞臺で、云へといふので、多見藏にこの老ぼれとやつたので、お客が承知しない、右團治風情が、多見藏を捉へて老ぼれとは生意氣だといふので、人氣は墮ち、客の同情が多見藏に集まつた。

食滿――若いから多見藏に乘せられて仕舞つたのだ。

鳥江――逆宣傳はよくやつたものですな。

大川――右團治が多見藏にやられたことはまだある、志津馬――道中双六――に右團治がなり政右衛門に多見藏

の役であつたが、斬つてみいといふので、右團治が斬つて、どんなものだいとやつた、すると、多見藏が、アーあマあ、マあ見事〳〵と皮肉つたのだ、それほど格が違つてゐたが、多見藏が右團治のために首を馘られたことがある、それは永年、多見藏の許で辛抱したが、多見藏が座頭で、卷頭になれなかつたところへ、市川鰕十郎を卷頭にするといふので、右團治が怒り出して俺れは角の芝居に出ないといふて最眉先の伏見の親分のところへ行つて仕舞つて芝居に顔を出さない、困つた揚句追手が漸くのことで右團治を連れ戻して來たが、多見藏の仕打ちが悪い、多見藏と一緒に芝居はしないといふのでとう〳〵多見藏を落して、盗賊芝居の「柿本金助」を演つた、それで多見藏は堀江の市の側の芝居で「石川五右衛門」を出して角と競爭したことがある。

鷺谷――右團治も、それで溜飲を下げたわけですね。

大川――さうです、このごろではやつてゐないが、昔の芝居ではだんだらうといふものをよく出した、中村玉助――三代目歌右衛門――が始めて「だんだら」を出したのだがエライ優で、ウズの「だんだら」といへば有名なものであつた、金と銀のだんだらだつたが、實に立派なものであつた。

鷺谷――「だんだら」とは……

大川――舞臺一面總て「だんだら」一色にして、役者の衣裳から袴に至るまで、だんだらで、道具も後見の衣付も襖、欄間、幕もだんだらにして仕舞つたもので、そして二の替りは大曲輪を出した。

食滿――詰り、中日のレビュだ。

大川――この大曲輪の場には、出る役者の人數といふものが定つてゐて、立役が四人出れば敵役も四人出る、お姫様が出れば必ず腰元がつく、上使が出るときは家老が出て裁きがあるもので、幹部役者の顔は全部揃へてみせたものだ。

鷺谷――さういつた歌舞伎の綺麗なところは時間の關係でみられなくなつたわけですよ。

大川――昔の芝居は朝早くから始つたものです、それで序幕が開いてから次の場までは相當の長い時間があつたので、役者が半無性をきめ込んだものです。呑氣なもので、二段目ごろになつて、お客が揃ふて來たといふので、弗々と役者が顔を出すといつた按配で、その間の役は代役を舞臺へ出して、自分は家で半無性をきめ込んだので、脚のついてない馬が舞臺の中央においてあつたりしたもので、役者はルーズであつた、敵役が花道から棧敷へ逃げ込んで最眉客とお酒を飲んでゐるやうなこと平氣でしてゐた。

鷺谷――そのころの役者にはどんな優がゐました。

大川――角の芝居に、市川右團治、實

川八百藏、市川鰕十郎、實川正朝、嵐團之助、淺尾奥山、市川猿藏（九代目團十郎の弟）中の芝居には中村福助、中村宗十郎、中村雀右衛門、中村鴈治郎、阪東壽三郎、女形の中村紫琴、片岡松太郎、嵐璃笑などがゐて、浪花座には嵐橘三郎、市川荒五郎、實川芦鴈嵐璃寛、實川延若といつた連中で、この三座が競爭であつたが、角の芝居が、一番不座でいかなかつた。多見藏は必ず角に入つたもので、中の芝居と浪花座には出なかつた。

篠山——私の來たときは、浪花座の方が一番よく、中の芝居は下火になつてゐた。

大川——私が知つてゐるのは、浪花座が、まだ戎座と云つてゐた時代からで、この芝居の一番最初は、筑後の芝居と云つて、それから大西になり、戎座となつて、浪花座と改めた。

篠山——そのころ角の芝居はケレンで客を呼んでゐましたな。

大川——さうでした、當時として又珍らしかつたのは、電氣を應用して芝居をした、中の芝居で、「薩摩潟雲間月影」を演つたことがある、役は西郷に先代雀右衛門、月照宗十郎、平野次郎嵐吉三郎で、舞臺の月はガラスで拵へて電氣で映出し、波も舟も電氣を應用したといふので、大變な評判であつた。

篠山——市川猿藏といふ役者は一向振はぬ優でしたな。

大川——九代目團十郎の弟ですが、どうも振はない、それで相生橋北詰に成田屋といふ蠟燭屋があつて、非常に流行つたものですが、成田屋は蠟燭屋に奪られたと云つて歎いてゐた、法善寺は金比羅さんに奪られ、大師は弘法に奪られ、成田屋は蠟燭屋に奪られ。といふやうなことを自分で云つてゐたが、東京へ歸り、市川海老藏を名乘つて亡くなりました。

篠山——そのころの役者はよく無茶の臺詞を云つてゐたものですな、仁左など、切狂言「沼津の平作」の重兵衛を演つたとき、花道から舞臺をクルッと廻る間に、臺詞の中に、而し〳〵と云ふ言葉がよく出るので、勘定してみたら三十何べんも云ふてゐた。

食滿——その「沼津の平作」で假花から花道へ廻るとき、お茶子が出孫でゐねむつてゐた、仁左が怒りながら「もし旦那、わしがかうして一生懸命つとめてゐますのにお茶子がゐねむつてゐます」なんて無茶の臺詞を云つたことがあつた。

鳥江——矢張りこの重兵衛のときですが、仁左の臺詞は云ふたびに違ふてゐた、脚本にないことを勝手にやつてゐましたね。

大川——「鬼一法眼三略卷」では文箱を持つて出るのだが、我當時代の仁左は文箱を持つて出なかつた、花道へ出てから、忘れてゐないかといふと「直に申上げたき御諚」といふ文句があるち

やないか、それに文箱を持つて出るには當るまい、不合理だといふので、文箱を持たずに芝居をやつて仕舞つたが、今では誰がしても、この芝居で文箱を持つて出るものはゐないやうになつた。

鳥江――歌舞伎にはさういつた不合理なところがあつても、そのまゝ押し通してゐるやうなことは有名な優だちの間にもありましたね。

大川――宗十郎に私が五十錢貰つた話がある、エライ優で、客がみへない蔭でも、チヤンと芝居をやつてゐた、菅原傳授の首實檢の場で、首を打つて差出す源藏を宗十郎がやつた、幕の内に入つて來ると、私が半丈の疊と棒を持つて來るやうに言付けられてゐたので刀を拔いて〝エイツ〟と聲をかけて首を打つと、私が疊を棒で叩いた、樂屋中宗十郎は氣狂ひやといふてゐたが、それから桶に蓋して、襷を外し、肩を入れて首桶を持つて舞臺に出たものでで二十五日の間、私はこの疊を叩いてゐた、宗十郎が、あれを呼べと狂言方の音助にいふので、私が行くと五十錢くれた、このときは玄蕃、菅相亟に齋入、源藏と覺壽は宗十郎であつたが、右團治がある時菅相亟の杖のせつかんの場でトチつたのだつた、宗十郎が私に相亟の木像を右團治の部屋へもつて行つてやれと云ひつけた、これは木像をとりに行つたら自分がセリフを云ひに出なければならないからさうさつすればトチらないといふ皮肉な考へだつた。

食滿――いゝ話ですな鴈治郎はちやんと羽織て着て木像のカタチで坐つて、あのセリフを云つてました。

大川――そのころ、右團治は似顔の人形の首を使つたりした、東京の人形師安本龜八が右團治の似顔を拵へて、首を斬られたときなどヒツクリ返へると、その人形の首が出た、齋入の與三鴈治郎のお富、宗十郎の赤間源左衛門琥珀郎の蝙蝠安をやつたときは、斬つた刀の先きから血が出るやうな仕掛けをしてみせた、今では警察で喧しくなつてやれないが、齋入がふところへ血糊をしこんだ牛の皮の袋を入れて本當にそれをつくと血の出るといふ仕掛なんか使つた。

食滿――それに就て面白い話がある、片岡仁左衛門が千代田の刄傷といふ芝居で大詰で多くの人を殺して、自分は階段に足ふみかけて首筋へ一刀を突込むキツサキが首へぬけるしかけそれに帶皮をしかけて小さく引いてキツサキが出るといふのだつたが、仁左門はいつもグツと突込んでから自分の手で出てゐるか出てゐないかさぐつて見るので大笑ひだつた。

大川――そのころの最眞連の競爭も激しかつた、恰度、鴈治郎の三浦荒次郎我當の源左衛門で、中幕に「玉取」「茨薗桑門筑紫」一切に「油屋與兵衛」を出した、我當の夕秀で、鴈治郎の新洞左衛

門に出たのだが、舞臺に我當が出る番になると棧敷のイ菱連の席が空になる、鴈治郎が出る番になると銀杏連の席はガラ空きになつて贔屓連の張り合で困つたことがある、その後仲裁が入つて、今後さうした、競爭はさせないといふことになつた、鴈治郎と我當が競爭してゐたのは四十年位になるが、大體は道頓堀の人は我當よりは鴈治郎黨が多かつた。

食滿――競爭といへば、其頃の役者はよく作者なんかをつれて飲みに行つたものだ、松島屋の息子が、今夜富田屋へ行かうとか云ふてくると、高島屋の息子の方からは吉田屋へ來いとテツパリ天ぴんにかけて出かけるといつた風だつた、私なんかは長三郎とよく一緒に遊びに出かけ一時花の家の南北なんか云はれた、我當ともよく行つた、大抵私に二人前のお膳をしてくれた。

大川――琥珀郎のところへフグをもつて來たものがあつた、作者部屋へもつて來て皆たべてくれと云つたがフグに酒がつきものでフグだけは食はぬと突返したら、改めて酒二升つけてもたしてよこした、琥珀郎の男衆がココワコワイところだと云つてゐた。

食滿――鴈治郎が梅助といふ菊五郎の弟子に實盛物語を敎へて貰つたことがある、あとで私が菊五郎と梅とどの位違ひますかと聞いたら、延若と政之助位違ふと云つてゐた。

鳥江――錦繪のやうな役者の顏といふものは餘りありません、昔の役者は面長といつたものが多いやうで、今の役者は肉つきが多少過ぎるやうです、大體に東京は長く、大阪は丸い方ですね。

大川――囃方に阪東定次郎、石田幸次郎といふ人がゐたが、宗十郎が、大盞をやるのに、河へ石を放り込むところがある、その水音が氣に入らず駄目だといふので、石田幸次郎が、太左衛門橋から河中に飛込んで、どんな音がするものかと研究したといふ話がある、今時分そんなことしたら阿呆といはれる……。

杵屋――この頃は擬音などつかつてゐるが、波の音などなつてない。

食滿――ジャー〳〵〳〵とやつたのでは感じが來ない、矢張りドン、ドン、ドン〳〵といふ太鼓の音の方がよい。

杵屋――歌舞伎では太鼓の音でなければ本當の波の音は聞けない。

大川――仁左衛門が角で、鴈治郎が中の芝居で同じ又平を出して競爭してゐたことがあるが、仁左は本物の鰻を使ふた、右團治は親類だから松島屋をほめると機嫌がよかつた、中の方が氣になるとみへて、角はどうやと聞くので一杯です、松島屋はホンマの鰻を使ふといふので評判だつせといふと、ホンマか、それぢや矢張り鴈治郎は鴈治郎だ、ホンマの鰻を使はぬと、芝居が出來ぬとはマケやと云つた。

食滿――權十郎は權之助の息子かし

ら。

篠山――權之助には男の子はない筈で、紫扇といふ女の子があると思ふてゐる。

大川――權十郎は中井櫻州山人の落胤といふことだ。

食滿――その權之助が、まだ私が二十才位のころ、久松町の安い料理屋で板場に祝儀を十圓もやつたので、私はびつくりしたことがある、そのころの十圓は今日の百圓位に當るからな。

大川――名人團十郎の權之助時代には大根と呼ばれてゐて、上手と云はれたのは五代目菊五郎の方だつた、小團次は默阿彌ものが得意であつた。

大川――小團次は御所五郎藏、腕の喜三郎、いかけ松が得意で、小團次の三難題といはれてゐた、御所五郎藏では腹を切つて尺八を吹く、腕の喜三郎では左の手で立廻りをやるのだが、いかけ松は錆びた刀、薪割るやうな刀で腹を切るといふ三難題の狂言も見事仕負うせて大入をとつた、小團次は時代物より世話物がうまかつた、死ぬ時の狂言は幼曾我をやつてゐたので畠山重忠をした其三幕目殿中命乞ひの幕切に「萬代不易にござりまする」といふ舞臺詞があるが小團次死去の跡は幕内はだん〳〵不景氣にござりまするとと云つて芝居の不景のことをいつてゐた。

大川――明治二十年年七月夏の芝居で鴈治郎、右團次、宗十郎で一番目が夏祭切狂言に重の井を出したことがある宗十郎の重の井、小役の三吉、今の源十郎其頃の實川正太郎で、坂は照る照るで柝が入るとヂャンヂャン、ヂャンと行？三重のところになる、その柝の打ち方のチョン〳〵チョンの後きざみが悪いといふので木場七兵衛頭取から私が呼ばれて宗十郎に叱られたことがある、囃方の阪東德三郎は日トチツた時三味線の彈き方が違ふといふてゐたが、チャンと立三味線のゐないことを知つてゐた。

大川――この間の多見藏が十段目の光秀をやつた時、笹屋に來てくれといふて、八十本も笹を買ふたので笹屋が苦い顏してゐたことがある、何か氣に入らぬとプン〳〵怒つて困ることがあると食滿さんに行つて貰つてゐた。

食滿――私が行くと大體納つたな。

大川――先代多見藏といふ人は膽玉と云われる程でエラかつた、太左衛門橋北詰に住んで居たから、濱の親方と云うた、毎年正月二日の朝は今での四時頃から、難波の八阪神社、高津神社、法善寺金比羅へ詣うでゝ、歸りは左太中門橋を渡る頃、恰度二日の雜煮餅へ入れる水菜賣が出逢う事になつて居るヲイ水菜や其水菜何ぼや、ヘイ二十錢です、ヲイ已れは多見藏や十錢に負けとけ、宜しい親方なら負けました已れに負けた〳〵と云うて喜んでそれを買うて連れて歸り已れに負けよつた御祝儀をやれと家内がチャント拵らへ事をしてあるのを知らず水菜やに祝儀を遣

つて歸し二日の雜煮を祝うといふ、初春から相手を負かすといふ緣起を祝うた人でまける事のきらいな人といふ事は永年傍に附て居た尾上多見升（松島松右衛門といふ）頭取の咄しでした。

鶯谷――だんだらとは……。

食滿――坂町に住んでゐたころ、貧乏で炭屋が持つて來ない、男衆が親方、炭がないといふので、よしわしが買ふてやらうと、玄關に坐つて、炭屋が通ると、オイ、炭屋わしは多見藏や、炭を持つて來いといふので、炭屋がヘーと云ふて親方らしい威勢に恐れて炭を持つて來たといふ話だ。

大川――それについて、こんな話もある、多見藏の家の前へ來ると、夜泣きうどんやはリンをかくして道を避けたといふことだ、それから今の相生橋通り、髭そりといふところの別莊にゐたころの話だが、泥棒が入つたと騒いだことがある、男衆が親方泥棒が入りましたといふので藏へ駈けつけて、芝居道具の槍を持出し泥棒、待てと怒鳴つて來るので、親方泥棒は逃げましたといふと、惜しいことをした、わしの威勢に恐れて逃げよつたかといふて喜んでゐたといふ逸話がある。

鳥江――此間の多見之助は其多見藏の弟子ですか。

大川――そうです、多見之助は弟子ですが、元は名優であつた阪彦（阪東彦三郎）の養子になつて、阪東鶴之助といふたそうですが、餘り惡戯で手におへず何か有つて不緣になり母方の產れ故郷の京都へ歸り多見藏の弟子に京都の小芝居を打ちとつて居たそふですが私しが知つたは京都の京極道場の芝居（後の歌舞伎座）目下映畫になつている其頃京角座といつた芝居で一座は右團次（後の齋入）市川鍛太郎、阪東三津三、中村友三、淺尾奥山、嵐巖笑といふ一座へ京都の俳優として淺尾吉三郎、尾上多見之助の二人が加入しました、此興行中（腕試覺劍法）といふ狂言（腕の喜三郎）の女房役をして居た三津三が病氣をした所サア困つたのは代役の俳優、誰れにしよふか彼に仕よふか右團次に相談すると多見之助でよろしいといふ、頭取、作者は驚きました餘りの事で不穩意乍ら命じらるゝまゝ代役をさしたが一生懸命でもありませうが三津三より遙か能かつたと思ひます。

食滿――右團次の活眼當を得たといふのですナ。

大川――其興行を終つて、角座へ歸り、中村福助（後梅玉）實川八百藏、阪東壽三郎（先代）嵐巖笑、阪東豊作（現市藏）市川鍛十郎、中村珊瑚郎、中村紫琴、阪東三津三の一座にて、狂言は橋供養梵字文覺、九代目團十郎が演ぜし文覺上人、關西で大薩摩の出語り色花火を使用した始めで大評判になつた狂言です、中幕が（鐘鳴今朝鳴）大

切が（嫗山姥）にて稽古になつても三津三が引續いての病魔におそわれて全快しません、處で右團次は多見之助を呼んで其代役をさせようと云ひ出し、自ら使ひを出して出勤させる事にしました其時は多見之助が二十歳給料は二十五日間（二十五圓）でした。

食滿――多見藏を襲名するまで中々苦勞もしましたらうが味ィ役者でした私しとは馬が合ひました。

大川――そうです食滿さんの書き物ですと役を請取つても喜んで居りました、中にも聚樂物語の增田左門ほど好きな役はなかつたと見へます、然し衛々五月蠅ひ人でした。

食滿――晩年は實に氣の毒でしたナ、曾我の對面の賴朝が二帖になつて押出されて居た時はホロリとしました。

大川――尾上卯三郎の弟子に尾上卯十郎といふ人がありました（今は廢業して居る）此人は三枚目道化で一時は成駒家さんにも引立られた人、此人と卯三郎が自動車でいつも遠乘りをしたハイカラでした。

食滿――演す事はバンカラで然しソレおかん長三の平旦那、アレはあの人に限つた樣でしたナ、鴈治郎もあの役斗りは箱登羅に演らせとはいわなかつた。

鷲谷――ではこの邊で……有難ふございました。

（終）

木戸の念佛

缺居の木戸のもの熱病を患ひ、いろ〳〵療治すれ共叶はず、今ははや世に頼みすくなう見えければ、一門一家打寄り念佛をすゝむれど、芝居の事を譫言にいひて念佛を申さねば皆させんかた涙にくれ居だる折から座本見まひに來て、いで〳〵念佛申させて見すべしとて、病人の耳に口を當て、これ六兵衛、又御停止じやといふといなや病人なむあみだ佛といふた。【輕口浮飄筆より】

◇近世上方名優傳◇

中村宗十郎(二)

高谷　伸

中村宗十郎と改めたのは慶應元年である。藝はそのやうに認められてはきたが名人氣質ともいふべき性格は一種の變り者として家庭的には惠まれなかつたので家付きの女房との折合ひはわるかつた。腕で立つといふ聟と氣まゝなおみちとでは衝突するのが當然で勢ひ酒に氣をまぎらし醉ふた亂暴が難癖ともなつた。

小糠三合どころか手腕に十分の自信を持つた源之助は決心して養家を去つた。

それに責任を感じ二つにはその舞臺人としての技倆に希望をかけたのは媒酌の勞を取つた雀右衛門だつた。弟子分として中村宗十郎を名乘らせた。その中村を稱したのは右の事情ではあるが彼を見出した赤穗屋太三郎に歌右衛門門下で甄八といふ悴があつたが早世したのでそれを慰めるためだともいふし宗十郎を稱したのは澤村家では源之助から宗十郎に昇るといふ順序があるのに倣つて三桝源之助だから次は宗十郎になつたといふ說もあるがさう廻りくどく考へるより宗右衛門町に住んだ緣故で宗十郎と稱したとふ說云の方が素直だと思ふ。宗十郎の名は寬文から寬保へ二代續いてはゐるが彼はそれに因つて三代目を稱せず獨立して宗

十郎初代と稱したのである。

慶應元年正月は堀江の芝居で『いろは歌』の田代安兵衛と石屋五郎太『關の扉』の小町と墨染、三月は筑後で先代萩の政岡と勝元、明烏の時次郎、五月は石井常右衛門とめくら兵助、九月は京へ移つて乳貰ひなどを勤め、翌二年は筑後の芝居で『鳴門白浪』の十郎兵衛と伊左衛門、三月は『忠臣藏』の判官と勘平、四月は菅原の松王と菅相亟に戻駕の與四郎、八月は近八の盛綱と四谷怪談の伊右衛門、九月は紙治その翌三年二月は中の芝居で薄雪の妻平と六歌仙の喜撰と業平、八月は筑後の萩伊達染に松ケ枝的之助、島田重三郎と仁木彈正直則、九月は佐賀曙に乳貰ひを持ち込み義政公や狩野四郎次郎といふ役で主として筑後の芝居を根城にして延若が書出しの場合は別座、宗十郎の書出しの場合は延若が別座といふ風に雁行して進みながら世は明治となつた。

明治元年は三月中の芝居に浮田金吾と工藤、四月筑後の芝居に與茂七と縫之助、七月は雛助の野晒に地獄太夫、延若の兵助に朝比奈藤兵衛、九月は大和橋の三七信孝、翌二年は正月は筑後の巳入盛曾我の十郎と鬼王、二月は京都で同狂言、三月は筑後で由良助と若狭助（註一）五月南座の福岡貢、七月は筑後の戀の山崎に南方十次兵衛とそばや與兵衛、九月は『山姥の煙草屋源七、十月は保名、十一月は天滿で佐々木盛綱、明治三年は正月は筑後の芝居で八犬傳の信乃と角太郎と房八に五人男の南鄕力丸、二月はそれを京の北の芝居へ持越し、三月は筑後の忠臣藏に師直と勘平、五月は毛谷村六助、七月は研辰の唐崎九市郎と鴈金五紋の雷庄九郎、十月は堀江の芝居で京の顔見世には盛綱と山形屋德兵衛である。（註二）

明治四年は二月中の芝居で花繪合の筑紫の權六、三月は忠臣藏の判官戸奈瀨十太郎に出入湊の五郎八、五月は京で朝顔話の駒澤、七月は筑後の相馬太郎に大宅太郎と安六と田原右衛

註一
日本演劇史に石堂と桃井とあれど番附には由良助と若狭助不破勝右衛門の三役である。

註二
明治三年南側芝居の顔見世興行には二種の番附がある

宗十郎加入の契情染分網と近江源氏鐘鳴今朝噂の三本立と近八を抜いて釜淵双級巴を加へたものとである。どちらからどちらへ變更したものか識者の示教をまつ

門、八月は中で藤屋伊左衛門、九月は堀江の鏡山、十一月が筑後で鎌倉山の源左衛門と天網島の紙治といふ役どころだつた。

明治五年三月松島に劇場が新築された柿葺落しに殆んど全大阪の俳優を網羅して『勝関松島新舞臺』の名題で大阪陣などの芝居が演ぜられた。世にいふ松島の大一座である。番附も位置がむづかしいのと人が多いのとで二枚番附にし璃寛、友右衛門、橘三郎、松緑で一組他の一組は宗十郎書出しで延若が始めて座頭になつたのである。宗十郎は明石掃部之助、眞柴久吉、延若は眞田幸村、薄田隼人に武智十次郎である。この時宗十郎は延若と衝突して大阪を去ることになつた。不遇時代には相携えて旅から旅へ放浪したこともあつた二人ではあるがお互ひに地位ができ自信がつくと反撥しあふ何物かがあつた。一歩先んじて座頭の地位を延若に讓つたが自負心の強い宗十郎は延若の膝下にあるを潔しとせずそこに不和が醸成された。

四月下旬名古屋末廣座に據つた宗十郎は仙昇、あづま、芝藏といふ一座で前『有職鎌倉山』中『ちらし書かくしの紅筆』切『心中天網島』で源左衛門と紙治を勤めたが、故郷といふものはよいやうでわるい所もある。豫言者は郷土に容れられずといふ西諺もある。久しぶりに出世した土地の俳優といふ人氣のあつた一面、風呂屋の悴だけにぬるい仕打だとか伊勢の料理番だとか里にやつた子は如何したといふやうな悪態も混じつてきた。

宗十郎にも血も涙もある。別れた子が父として愛しくない筈はない心にかゝることは言ふまでもない。その悴に邂逅する日がきた。それは六月興行に荒五郎と一座して前が近江源氏切が五大力で盛綱と源五兵衛を勤めた四日目の事である。芝居の裏木戸に十二三の子が手織木綿の單物といふ姿で覗き込んでゐるのを裏方の者が見つけた。『邪魔だ邪魔だ。見物なら

表だといふと言ひ憎さうに見物ではありません親に逢ひたくて……』とまう涙ぐんでゐる。『親の名は何といふのだまさか阿波の十郎兵衛ぢやあるめえ』と笑ひながらいふと『中村宗十郎と申します』『親方は宗十郎さんだがおまへは誰に逢ふのだ』ときくと『その宗十郎に』と言はれて、つくづく見直すとどこか面ざしも似てゐるので、そつと親方に耳うちすると『人に知れぬやう逢はう』とのことに其子にも旨を含めて楽屋へ通し『親はなくとも子は育つ』と再會を喜びそつと歸して打出してからしみじみ語りあひ當時としては大金の三十兩を里親へと持たせて歸つたとのことである。

藝の巧拙よりも素性を洗ふウガチや素ッ破ぬきの多い故郷の地に親しめなかつた宗十郎は大阪へ戻つて十月は松島芝居で武部源藏と平野屋德兵衛、翌六年の二月は筑後の芝居で栄種御供の十作、四月は先代の綱宗と鐵之兵と板倉内膳に龜屋忠兵衛、五月には延若と一座して筑後の芝居で前がひらかな盛衰記中が安達の三切が油商人廓話で延若の與兵衛には十次兵衛宗十郎の貞任と袖萩の早替りには延若が八幡太郎でつきあひ位置は延若が座頭、坂東壽太郎が書出しで彼の客座といふことで和解の曙光は見えてゐたのだが東京から迎へがあつたのでこれを名殘りに東上することになつた。

宗十郎に東京で目をつけ初めたのは守田勘彌だつた。内々で交渉をはじめたがそちらには坂東彦三郎といふ大ものが頑張つてゐるので應じないうちに村山座の擔當人甲子屋萬藏が引抜きに行き一芝居千五百圓の外に初上りだから座方一同へ羽織の總仕着に四百圓といふ高給で契約したとのことである。何しろ江戸役者筆頭の彦三郎が五百五十兩に座頭料三十兩といふ時代だけにその高給に目を瞠らせると共に團十郎も八百五十圓にかけもち料の五百五十圓を加へ仕着料共千八百圓に上り菊五郎千二十圓といふ給金インフレ時代を示したものである。

村山座の初日は九月二十四日一番目は桃山譚、中幕奥州安達原、二番目籠鳥鄙小唄で十一代目羽左衛門の追善や菊五郎の倅菊之助の初舞臺まで持ち込み三升の關羽實は五右衛門に加藤清正、宗任、菊五郎の寺西閑心に踊もの家橘の八幡太郎、白井權八、曾我十郎、そして宗十郎は小早川高景、豊臣秀吉、仕丁次郎又と中幕に貞任と袖萩とを見せた。

この顔つなぎの時に三升（團十郎）菊五郎、家橘など一座の並んだ所へ座元が宗十郎をひき合せると一同が叮嚀に挨拶してゐるのに輕るく一禮したのみだつた。ところが市川門之助が入つてくると座を下つて恭々しく挨拶したので一座の者が二度吃驚したといふ話がある。さうした變り者でよく人の意外に出て世評に拘らず尊敬する俳優には禮儀を正し座頭でも時には無禮な程無關心だといふやうな事もあつた。

この興行中に家橘が病氣したので代役に困つてゐると宗十郎が進んでひきうけやうと言ひだした。初上りだし地位も上なものが代役とは習慣も先例もないといふと座のためにすることだからと手もなく引きうけてしまつた。高給を取つた代りにいざとなると習慣を超えて座のために盡くすといふうれしい心イキもあつたのである。

この安達原は苦心の跡は見えたれど評判あまり芳しからず然し江戸向きの役者なり迎好劇家は歡迎したり（註三）とある。續いて十一月には忠臣いろは實記と菊畑で不破數右衛門と智惠内切に廓文章の伊左衛門を勤め、七年三月は曾我實傳と霞網島で曾我十郎と賴朝、紙治淨瑠璃では望月左衛門、その後村山座が財政困難になつたので中村座に轉じ六月に伊賀越の政右衛門と重兵衛戀飛脚の忠兵衛で半四郎の梅川、仲藏の孫右衛門と一座し八月には菊五郎と宇都宮へ行つたがこの時が二荒神社の不敬事件で町廻りのうちにうつかり下乘と書いた所へ駕籠を乘入れたために菊五郎はじめ朱房の十手で追ひ廻され代表者は栃木の裁（つゞく）

註三　この評判續續歌舞伎年代記卷の七による。

映畫

映畫界放談

玉木潤一郎

戯曲に迫るトーキー脚本

我が國の映畫も無聲時代とちがつてもの云ふトーキー映畫となつてからはその臺本は舞臺臺本となんら變りない程むづかしくなつた。

そも〳〵一と昔まへまでは舞臺俳優は映畫を――もつともその頃は活動寫眞と云つたが――場違ひ的な見世物の一種だと見さげゐた、もし、それら舞臺俳優の仲間が映畫界へ轉籍した場合かならず彼等は墮落したと輕蔑し、それまでその人間が苦勞して築きあげた置位を、なんら容赦せず掠奪してしまふ。そしてその人間が辱をしのんで再び舞臺へ戻つて來たものなら、それこそ大變でいままでの置位は無論、いままで待遇なぞと云ふものはどこかへ吹け飛んでしまつて、白い眼でにらみつけて出來得るだけの虐待をする、それが普通であつた。

それ程、映畫界には舞臺の苦勞と違つて呑氣なところがあるだけに、素人の集合團體の樣に映畫會社は思はれ馬鹿にされてゐた。しかし、またさう思はれる樣なところがないでもなかつたもと〳〵舞臺から映畫に轉籍してくる者は、革命兒かなまけ者かの二つのうちどちらかである。例をあげれば、前者に屬する者に長十郎、甍右衛門のひきいる前進座がそうである。後者に嵌る者は臺詞のおぼへられない踊の下手な舞臺の素質に欠けた者で、ただ姿と顏だけ出して居ればヤンヤと受けてスターになつた人物が幾人もあつた。

だが、それも一と昔前の話しでトーキー時代となつて來た今日では、舞臺以上にむづかしい演技と臺詞が、正確な嚴然とした機械によつて再生され、ハツキリした下手、上手が何時まで經つても消えずに殘されると云ふ時勢になつて來たので、遂に居たたまらず四苦八苦の揚句、舞臺へ歸つて行つてドサ廻りの田舍役者に落ちて行つたものも幾人となくある。又、映畫界生拔きの俳優にしてもその事は云へるであらう。かつての無聲映畫時代の夢ばかり見てゐて、その次に來るものに對して何ら準備のしてなかつたものは、それこそ見る目も痛ましい程、コビツどく打きのめされ、今日のスターは明日の下廻りで居られたらまだしも、馘首さ

れて遂にルンペンにまでなり下つた連中が澤山ある。しかしあはれな事にはルンペンとなつてゐても、まだ昔の華やかなりし頃の夢が醒めず、溺れるもの藁をつかむの例で知人と云ふ知人は片ッ端から訪れ、映畫界に入れてもらおうとモガいてゐる。そして、そうした連中の生活は型にはまつた如く苦しく、そのために最愛のかつては華やかであつた妻のしなびた顏に安白粉を塗りたてて、バーの女給に出すのがお定まりで、それに依つてからうじて命をつないで行くのであるが、夫君の悲慘さに引きかへ、あり餘る札ビラを温水の如く切りまくるブル氏の姿を見てはついフラ〳〵となり何時しかうまく生きた人形にされてしまひ、かつては最愛のあこがれであつた夫君に永遠のおさらばを告げるなど、映畫のストーリーそつくりの悲喜劇が展開された事も二、三あつた。

話はとんだ横道へ外れてしまつたが云はんとする處は、現在では舞臺と映畫とはいづれが甲でいづれが乙と區別されないむづかしい時勢となつて來たと云ふ事で、その中で特にむづかしいのは序の口に書いたトーキーシナリオである。

從前は辯的にさへ唄はせておけばそれですむ美辭麗句の文字をならべておれば、天下の脚本家だと肩で風きつて颯爽としてゐた人間が、今日のトーキー時代において怖氣ないで悠々と天下の大道を横行濶歩する脚本家がはたして幾人あるだらう。おそらくそれは九十九パーセントまで落伍してしまつたと云つても過言ではないだらう。

事實、それ程、トーキー映畫の脚本はむづかしい。脚本の如何によつて監督も、俳優も、常設館の支配人樣も少々頭がお薄い方であつても商賣の上に大當りする事は決定づけられると云ふ事を考へても判るであらう。

企畫第一時代

だが、更にむづかしいのは此の大當りをする、しないシナリオを左右する責任者の企畫部長である。

處が悲しい事には、それ程の企畫部長には大スター、大監督以上の給料を支給しても良いはずなのに、そう云ふ事には一向お構ひなしで、專らスター樣、監督樣々と云つてゐる處に、今日の日本映畫が躍進出來ない大きな理由であらう。最近の映畫ファンが盛んに論じたてゐる大プロデユウサー、ダリル・ザナックの存在を日本映畫の重役方が全然、認めないと云ふ事は皮肉を通りこして情ない次第であるが、また考へてみるとそうした重役方の支配する我が國映畫界にウロ〳〵してゐる人物に何千兩積んでも惜しくないと云ふ企畫部長のちよいと見當らないのは當然の事であらう。弱將の下に强兵なしと云ふ樣なものである。

そこで自然、つまらない原作もの、また舞臺臺本物の映畫化が流行してくるのだが、これは明らかに企畫部長の怠慢の現れで惡く云へば無能力の暴露である。なぜならば各スタヂオでは月に何本かの製作本數はハツキリ算盤玉より正確に決つてゐる。それによつて企畫部長は〇月〇週の映畫はこれ、〇月〇週には此の作品を出す、と云ふ樣に完全なプランをたて、例へば野球に强力打者ばかり選んで次々にバツターボツクスに出せば、かならず本壘打は續かなくとも輕いヒツトぐらひは續くのと同じ譯けで、完全なプランに基いて製作を行へば決してやれ製作費倒れだとか、また宣傳倒れだとかは出てこない筈である。處が、その完全なプランが出來ないとなると自然に苦しまぎれで臺詞本位の舞臺臺本だとか、講談式の原作ものとかを一夜漬けにして監督に押しつけ、五日以內でつくつてもらはぬと〇月〇週に出す映畫がないとヤイ〳〵云ふ。そうなると監督も仕方がないから、良心とか藝術慾とかはそこら邊へほり出しておいて、どうにかこうにか期日に間に合はす、そうなると映畫をつくつて居るのやら何をしてゐるのやら譯が判らなくなる。先づこう云ふ風にして企畫部長は月々の約束の本數を完全にあげてゐるのであるがこれでは何十年經つても普通の人間の頭がどうにかして來ないかぎり傑作は絕對に生れない事、時計よりも確實である。

こうした賴りない狀態の映畫會社があるから、映畫は行づまりだ、映畫は行づまつたとワイ〳〵云はれるが、事實は求めつくして行きづまつたのではなく、あり餘る豊富な原料に追ひかけ廻されて逃げ場を失つた行きづまりなのである。

『續愛染かつら』祕話

そうなつてくると企畫部長も何とかして名譽挽回のためにと色々苦心したすえ、まづまづ安全性のある人氣作家の原作ものと安易な妥協を結んでしまふ結果、一番ボロイ儲けをするのは人氣作家であると云ふ事になつてくる。

なかでも最もボロイのは書いても居ない原作料を稼ぐと云ふ、常識では考へられないいボロイ儲が出來るのだから人氣作者と云ふものはコワイものである。

その一、二の例をあげてみると、先づ雪之亟變化、三上於菟吉氏がある。この雪之亟變化は數年前に發表されて當時衣笠貞之助、林長二郎（現在の長谷川一夫）コンビで製作して興行界に一大センセイションをまき起し大當りをとつたものであるが、最近この雪之亟もの一切を——雪之亟變化は無論、今後三上氏が雪之亟もの續篇を書くか書かぬかは問題外で、とにかく雪之亟と名のつくものは全部、その舞臺化、映畫化、あらゆるものの獨占權を得るため

大松竹が三上氏に數萬金を積んで懇願したなどは、正に濡手に粟の摑みどりのボロ儲である。では松竹が何故いま頃こんな事をしたかと云ふと、衣笠貞之助監督の東寶入りで、長谷川一夫と久々のコンビで雪之亟ものをつくられてはたまらないと云ふ處から、それを封じた譯で仲々の名案であるが、三上氏にすれば衣笠樣々と云ふ事になる譯であらう。

次は、直木賞獲得以來、文壇、劇壇いたる處に敵なしと云ふ獨人的な勢ひで暴れ廻る當代の花形作家川口松太郎氏がある。故林不忘の獨參湯丹下左膳のお株を讓り受け新版丹下左膳をものしてからは、それが良かれ惡かれ愈々人氣は高まつて來た。

その川口氏が女性の心理をガツチリ握つて書きあげた愛染かつらは全國オール女性を熱狂させ、更に松竹大船で映畫化されるにいたつては、女性に對してはハンドバツクの如き密接な關係が生じ、遂に續愛染かつらにまで伸展して行つて、これまた物凄い大當りをとり、更に續々愛染かつら要望の聲が澎湃として起つて來たが、いづくんぞ知らんやで川口氏が本當に執筆したのは最初の愛染かつらだけで、續愛染かつらは大谷社長の企畫になつたもので川口氏は單に名前を借したにすぎないのであるがそれでも一定の原作料――こうなると話はさつぱり判らなくなる――が這入つてくるのだから、これをボロ儲けと云はずして何ぞやと云ふ事になる。事實、今後續々であらうと愛染かつらと名のつくものが現れるかぎり川口氏には結構な金づるである。

だが、世の中とはそう〳〵うまい事ばかり行かぬもので、今後この續々愛染かつらがはたして實現するかどうかと云ふ事と、我が國が誇つてよい唯一人の名プロデユウサー城戸四郎氏の事を敢てホメテ筆を賞く事にする。

そも〳〵營業部と云ふものは、さつぱりお先眞ツ暗で一度ヒットした映畫は何であらうとかんであらうと出せばかならずヒットするもの、と云ふ考へを古武士の如く固執してゐる難物である。愛染かつらの場合もまたしかりで最初のが受けたから續篇が受けるものと講談本の筋の如く考へて續篇製作をヤイ〳〵と云つてくる。だがこれに對して城戸氏は同じものを同じ樣な手段で繰り返してゐたのでは、更に映畫の發展向上は望まれないと極力廻避に努めてゐるが、時に依つてはフアンに喜ばれるものをつくる事も、これまた娯樂報國の一端であると、營業部の意見を通して、お求めの映畫をつくるがその代りこの映畫も賣つてもらひたいと野心作をもち出して、大衆版と野心作とを兩天秤にかけて古武士の如きコチ〳〵の營業部を納得させ、製作部側をも滿足させて行く處に大プロデユサー城戸四郎氏の偉さがあると紙面の都合上ざつくばらんにのべたが、それに依つて考へても續々愛染かつらが實現するかどうか甚だ疑問である。

踊るホノルル

メトロ映畫

配役

ドロシイ・マーチ……エリナー・パウエル
ブルツクス・メーソン
ジョージ・スミス……ロバート・ヤング
ジョー・ダフイ……ジョージ・バーンズ
ミリイ・ド・グラツセ……グレイシイ・アーレン
セシリア・グレイソン……リタ・ジョンソン
ホレース・グレイソン……クラレンス・コーブ

スタフ

監督……エドワード・バツゼル
脚本……ハーバート・フイールズ
フランク・バートス
音樂……ハリイ・ワーレン
作歌……ガス・カーン
撮影……レイ・ジューン

映畫スターのブルツクスは主演映畫の試寫會がハリウツドで開かれた時、殺倒する女性ファンを逃れて秘かに家へ歸つた。すると彼に瓜二つの青年ジョージが、ブルツクスと間違へられてファンに押し寄せられ、人事不省となつて病院自動車で運ばれて來た。

ジョージはハワイのパイナップル栽培業者だつたが、彼が紐育へ行きたがつてゐるのを知るとブルツクスは容貌が酷似してゐるのを幸に互に姓名を交換してジョージは紐育へ、ブルツクスはハワイへ出帆した。その船にはハワイへ行く踊り子ドロシイが友人のミリーと一緒に乘つてゐた。

ミリーは彼が映畫スターでないと聞いて落膽したが、ドロシーは却つてそのために彼と戀に落ちた。その頃ブルツクスと名乘つて紐育へ行つたジョージは、忽ち女性ファンに押し寄せられて負傷をし入院する樣な結果になる。そこでブルツクスの支配人ジョウに向つて、實はハワイの青年だと打明けたところ、支配人はブルツクスが精神錯亂したと信じて檻禁してしまふ。

船中の二人は樂しい航海をつづけてハワイへ着き、その夜の晩餐を約して別れた。

ところがブルツクスが農園へ行つてゐると、ジョージの戀人セシリアから假裝會の招待狀が來てゐる。しかもジョージはセシリアの父親から五萬弗盜難の嫌疑さへかけられてゐる

ブルツクスは漸く假裝會を拔出してドロシーの家へ行つたが、約束を守らなかつたため彼女は腹を立てて口もきかない。やつとミリーの取りなしで氣嫌を治し、二人はワイキキの海岸へ馬車を走らせ、折しも豪華な土地の祭禮が催されてゐたのでドロシイは女達の衣裳を借りて踊り狂つた。

翌朝ブルツクスは五萬弗盜難事件の犯人として投獄された。今になつて彼はジョージでないと言つても誰も信用しない。そこで紐育にゐる支配人に電話をかけ、ジョージを連れて飛行機で驅けつけさせた。そして萬事丸く收まり、ブルツクスはドロシーと結ばれ、ジョージもセシリアと結婚する事になつた。

大船作品

胸に咲く花

原作……有馬頼寧
〃……有馬頼義
脚色……猪俣勝人
監督……宗本英男
撮影……杉本正二郎
美術……五所福之助
音樂……萬城目正

□配役□

堀田三希夫……佐分利信
〃　六郎……葉山正雄
古川　友次……笠智衆
松島幽香子……三浦光子
父　社長……坂本武
母……岡村文子
長男……宮城哲夫
二男……島木茂
しづ子……槇芙佐子
權ちゃん……飯島善太郎
吉村　正一……廣瀬徹
アパートの小母さん……高松榮子
長屋の老婆……二葉かほる
幽香子の友達……羽田登貴子
〃　B……小櫻昌子
〃　C……高橋佳代子
醫師……河原侃二
社長秘書……小林十九二
女給　A……藤原かね子

——梗概——

青雲の野望に燃え、小學生の弟六郎を伴つて早春の故郷を離れる堀田三希夫は遙かな旅のわびしさにしづ子と知り合ひ彼女が看護婦志願で上京すると聞き、お互に暖い激勵を送りあつた。待望の東京に出た三希夫は久々で友次と舊交を温め彼の奔走で就職し非當時生活戰線へ乘り出した。前途を祀福して二人の青年はさくらサロンに乾杯したが偶然三希夫が酔客から救つた女給こそはしづ子であつた

以來男世帶の三希夫のアパートには洗濯、台所、裁縫等を整理したり、兄の留守を淋しがる六郎の話相手もする甲斐〳〵しいしづ子の優姿を見受けられた。一日お禮の意味で傷痍軍人感謝の音樂會へしづ子を伴つた三希夫は社長令孃幽香子に會つた。

幽香子は吉村と云ふ婚約者があるにも關はらず誕生日の晩餐に三希夫を招待し特別の好意を示した

六郎が大陸の天地に少年義勇軍を夢見る時、その兄はしづ子の可憐な思ひも知らず幽香子への思慕の念を抱いてゐた、そして幽香子の事で吉村から誤解を受けて三希夫は遂に暴力沙汰まで引起し警察に留置された。

冷たい雨の夜である、六郎は歸らぬ兄を探して街を探して彷徨つた。誰もゐない翌朝のアパートへ幽香子としづ子が訪ねて來たが愛する者の敏感さでしづ子は幽香子の心を察して部屋を出た。

悲しみのしづ子は友次に慰められ勵まされて健氣にも立上るのであつた。

三希夫が歸宅した時遲く六郎は少年義勇軍と大陸を夢みて逝つた

弟の死に已れの否青年の進路を教へられた三希夫は勇躍大陸開拓の理想を目指し友次に送られ乍ら先驅移民の一人として滿州へ出發した。幽香子は三希夫の新妻として、しづ子は大陸の花嫁として希望に滿ちて故國を離れるのだつた

京都作品

高田浩吉主演
伏見信子・久松三津枝共演

江戸ッ子大繁昌

演出……古野榮作
原作……館直志
脚色……小林正
撮影……森尾鐵郎

□配役□

左官久太郎……高田浩吉
生藥屋の娘お絹……伏見信子
樽松のお島……久松三津枝
左官伊之助……尾上榮二郎
三伯……高松錦之助
養子源次郎……山口勝久
大家源兵衛……坪井哲
町内五人組島屋……風間宗六
〃 中野屋……石原須磨男
〃 加助……廣田昂
〃 善兵衛……玉島愛造
左官の親方……中村政太郎
山田與力……新妻四郎
お絹の父幸助……林誠太郎
鳶頭辰五郎……中村吉松

――梗概――

町内は大騒ぎです、左官屋の久太郎がこともあらうに御法度の火の見櫓へ上つて了つたのです、かねて相思の仲お絹が家の破産を救ふ爲醫者三伯の養子源太郎の處へ嫁いで行かねばならぬ、面白くないッとばかり飲んで醉つてこの始末です。

役人に知れたらと大家さんや長屋の禿頭五人組の連中は氣が氣でない。

一人面白がつてがんばれ〳〵と久太郎の長期抗戰を聲援してゐるのは久太郎の友達の伊之助です、大家さん、一策を案じて久太郎を下ろせば一兩出そうと一同に申渡した、一兩と聞いて伊之助の奴たまりません、そこは仲良しのことうまくごまかして久太郎を引下ろして了ひます。「本日より禁酒仕候者也」――と書いた札を首にぶらさげた揚句一軒一軒詫びて歩かせられる久太郎です。

處が世の中といふのは奇妙なもの久太郎の母の遺言狀で醫者三伯が永年探してゐる實子こそ、この久太郎であることが判明した、左官屋久さん俄然三伯家の若旦那となつて久太郎夢見る心地です。

こうなるとお絹は久太郎のもの同然です、三伯は大變な喜び方伴よ伴よと抱きつかうとします、何が何だか解らなくなつた久太郎逃げ廻つた揚句また例の櫓へ上つて了つた、下では三伯、例の大家さん、禿頭五人組それにあの伊之助こんな人達が大騒ぎです、今度こそだまされんぞと久太郎妙な決心をしてる處へ馳せつけたのはお絹です「久さアん。久さアん！」

鶴の一聲とは正にこのことです櫓の上の久太郎、お絹の聲にすつかり御機嫌、あたふたと下りて來ました。

二人は固く抱き合つて嬉し泣きです。

騒いでゐた連中すつかりアテられ呆然として了つたのはいふまでもありません。

新興東京作

海棠の歌

■キャスト

原田　綾子……眞山くみ子
木村　珠子……高野　由美
大伴　春夫……新田　實
おさと……浦邊　粂子
酒井　釜吉……堀川浪之助
大伴　虎吉……菅井　一郎
柚木傳四郎……大井　正夫

藝者綾子は女將おさとの惡刺なるはからひとも知らず溫泉に休養に來てゐたが、太田黑の毒牙をようやくのがれて大伴春夫と云ふ金持の息子で親の決めた結婚が厭さに家を出てアパート生活してゐる青年畫家の自動車に助はれた。そして彼等は嘘から出た誠で結婚をしたのであつたが父親虎吉は春夫を勘當した。

春夫は生活の爲に挿繪を描いてゐたが、無理が却つて喀血して病院に入院する身となつた。それを看護してゐた綾子は金無く、養父酒井釜吉と女將おさとに見つけられて無理矢理連れもどされた。その頃綾子は春夫の種を宿してゐた

春夫は金持の息子と見てとつたおさとは彼の父親虎吉の邸に綾子の身代金をとりに行つたがさんざんな目に合はされて歸つて來た。

そして子を宿したと知つてゐる女將は綾子をマニラに賣らんとしてゴロツキの青木に賣らしたが、その時父釜吉が馳け込んで來て綾子を賣る事をこばんだ、それは柚木傳四郎と云ふ金持が苦鬪時代綾子を手離したのであつて、現在傳四郎が小供を探してゐるといふことが或る雜誌に出てゐると云うので、養父の彼が旨いしるをすをうと馳付けたのであつた。而しそこにはからくりがあつた。

綾子は昨日に變る今日、柚木家の令孃となつて病いにいえた春夫を婿として迎へ幸福だつた。而しそれもつかの間、釜吉の口より此處に意外なことを聞かされねばならない綾子であつた。それは同じ綾子の居た中武藏の姉奴藝者珠子が幼名綾子と云つて、實の柚木傳四郎の子であると云うことであつた。その頃、青木の生活に嫌氣のさした幼名綾子の珠子が逃げ出して來て柚木家に居る綾子の元に救いを求めに來た。

心良く引入れた綾子であつた。が、青木達の手によつて、珠子の存在は知られた、そして惡刺なる彼等は或る夜珠子を連れ去らうとしてゐた。

その頃、綾子は珠子に傳四郎の實子云々を傳へ樣として、珠子の危急を知り、それを知つた夫の春夫は青木等三人の後を濱邊に迫つて珠子を連れもどそうとしたが疵付た、而し警官隊によつて青木達は捕へられて居つた。そして珠子とそ實の子綾子であると告白した

今は柚木家の人間でなくなつた綾子と春夫、そして彼等の間に出來た小供三人はいづこともなく去つて行くのであつた。

■スタッフ

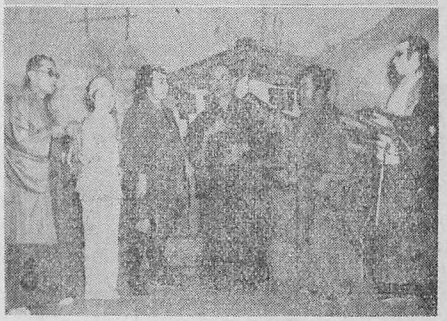
原作……小島政二郎
脚色……陶山密
監督……深田修造
撮影……青島順一郎
美術……進藤兼人
音樂……中川榮三
編輯……香川昌平
錄音……神保幹雄
記錄……本庄益子

五月の

1 五月一日——半島古典舞踊團の本土最初の本格的公演を四日初日で大劇に開ける半島一の美女軍李玉蘭宋明玉、金蕉紅、朴蘭玉に之李王職雅樂部員等と共に午前九時廿分梅田着。

2 五月四日——角座新舊大合同劇の二の替り狂言として上場、五月の關西劇壇にダンゼンヒットした大毎所載吉屋信子原作、中井泰孝脚色「女の教室」の上演に先立ち、女學生に扮する女優達は、京阪沿線牧野の大阪女子醫學專門學校を見學。

3 五月二十一日——歌舞伎座新國劇二の替狂言長谷川伸作「越後獅子祭」の舞臺監督に東京より遙々來阪した長谷川伸氏、同座舞台で島田辰見を始め主演俳優連と紀念撮影



新興演藝部

ズイーボたれきあ

◇◇介紹◇◇

坊屋三郎

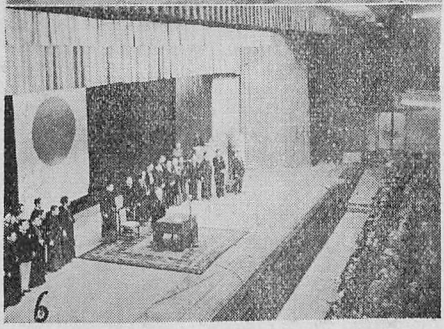
北海道生れ、北海中學より日大藝術科に進み卒業後松山芳野里の舞踊、音樂演劇研究所で松山の助手として研鑽、花月に入り「あきれた・ボーイズ」の一員として、ベティブープ、ポパイ、ミッキー・マウス、あひるのドナルド・ダック、めん鳥のクララ・クラック、犬のブルート等聲の漫畫に有名である。當年廿九歳。

益田喜頓

北海道の產、北海中學卒業後札幌にてU・G・M樂劇部に入り今日のスタートを切る。

淺草を中心に朝鮮滿洲まで巡業いくた辛酸をなめたがレヴューに生きレヴューに死せん覺悟は日常一瞬も忘れたことがない、立派なボードビ

アルバム



五月廿二日――角座の新舊大合同劇の呼物となつた「女の教室」を觀劇に原作者の吉屋信子女史が來阪、劇中の女醫專生徒達に圍まれて、團欒のひとしき、女の教室は新舊合同劇が最初の劇化で、しかも割れんばかりの大入氣、原作者の女史も大ホク〳〵

五月廿五日――松竹系劇場各座從業員の勤勞奉仕中座、角座、文樂座の從業員百五十名は午前六時角座に集合、南海電車で住吉神社へ先づ皇軍將士の武運長久を祈り、徒歩で住ノ江護國神社建設地域の清掃作業に從事し、午前十一時半開散した。

五月廿一日――大阪歌舞伎座の曾我祭一日より歌舞伎座に曾我祭紀念興行の蓋を開ける五郎劇は、開演に先立ち紀念狂言に因み、曾我祭を擧行、當日は開會前に、大阪地方海軍人事部長安住大佐の對局講演もあり紀念祭はひとしほの盛況を呈した。

リアンとなるのが念願である。

適役はボケ役、ギター、ピアノ、バスをよくする。今日までになる途中職業野球「大洋クラブ」の選手としてサード・ベースを守つたことあり。當年廿九歳。

芝　利英

北海道の産、北海中學出身、札幌にてU・G・M樂劇部に入り、その後グラン・テツカール、大竹フオーリーを轉々、花月で「あきれたボーイズ」を組織す。初舞臺より踊り專門であるが、ボードビリアンの名が今日の如く一般化しない以前より唄、踊、芝居をやつた。

二枚目、フケ專門でクラリネットで追分を演奏し、サキソホン、ドラムをよくする。惡癖は放浪性で田舍まわりが好き。當年廿七歳。

山茶花究

浪花の産、キツスイの贅六は、本人の仁義である。

淺草でデヴユー、歌手、タツパー役者、文藝部員と浮び沈み色々なことをした。聲帶模寫が得意であるがそれかあらぬか器用貧乏が表看板である。

新尖演藝部創立と共にあきれた・ボーイズに參加、當廿六年。

編輯室

×

歌舞伎座に曾我廼家五郎劇中座は松竹家庭劇と六月の大阪劇壇は爆笑陣の對峙、本誌もこゝに喜劇特輯と銘打つて編輯方針をたてた。

×

五郎劇と家庭劇に對する諸家の玉稿と共に特輯としては東西の劇文壇を始め社會の各方面に渉つて「五郎劇と家庭劇に注文したい事ども」を卒直に御漏らしを願つた。

兩劇團の當事者はもとよりこの種演劇のよき指針であり明日の喜劇を語るものとして切に讀者諸士の一讀をすゝめます。

×

これと同時に演劇當事者の言葉として兩劇團の俳優から「俳優になつた動機と笑はすコツ」を求めました。

×

興論をなす前者諸先生の言葉と共に俳優自身の言葉を聞くことはこの際決して徒事でないと深く信じる次第です。

×

神戸松竹劇場に左團次一座と中村魁車特別出演、京都南座に東西中村會の大顔合せで歌舞伎の競演は近ごろ關西劇壇の異彩、それ〴〵珠玉の名篇揃ひにこれが解説を森ほのほ氏に、吉右衛門の二條城に就ては川尻清潭氏より玉稿を得ましたが觀劇のあとさき、ひとしほの興趣を添へる名筆……。

×

松竹大阪支店の最古老大川澈江翁を圍んで芝居の表と裏を訊く會は紙上座談會として記者と共に娯める名優の逸話や佳話は得難い關西劇壇の一大文獻として敢へて一讀をおすゝめするゆゑん……

×

お斷り……紙面の都合で道頓堀十五年は休載の歇むなきに至りました。

（S生）

本誌編輯事務取營業事務は一切左の編輯部に於て取扱つてゐます。
月極申込其他お問合せは左の所へ願ひます。

大阪市南區大寶寺町仲之町六一　道頓堀編輯部

道頓堀　第百五拾號

定價　一部　金參拾錢（送料壹錢）
半年　六冊　金壹圓八拾錢
一年　十二冊　金參圓參拾錢（送料共）

▼廣告取扱　大阪電報通信社　北區中之島二丁目

▼廣告の御用は「電通」又は當編輯部へ御申附の事

昭和十四年六月八日印刷納本
昭和十四年六月十五日發行
大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內
發行兼編輯人　鳥江鎮也
大阪市東成區鶴橋北之町一
印刷所　加藤印刷所　電話天王寺二三四七番
大阪市西區土佐堀通り一ノ一五
發賣元　株式會社大阪參文社
大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內
發行所　道頓堀社
大阪市南區大寶寺町仲之町六一
道頓堀編輯部

西日本隨一の偉容！

大阪松坂屋は一万二千餘坪の威容を持ち、店内の施設は未だ嘗て試みられない各種新機軸を取入れて万全を盡し、商品の精選充實は素より、年來の店是たる廉價奉仕を徹底して『最も安い店、最も便利な店』として御愛顧を仰いでをります

營業所所在地
◇大阪 ◇東京（上野・銀座）
◇靜岡 ◇名古屋
◇北京 ◇天津 ◇上海

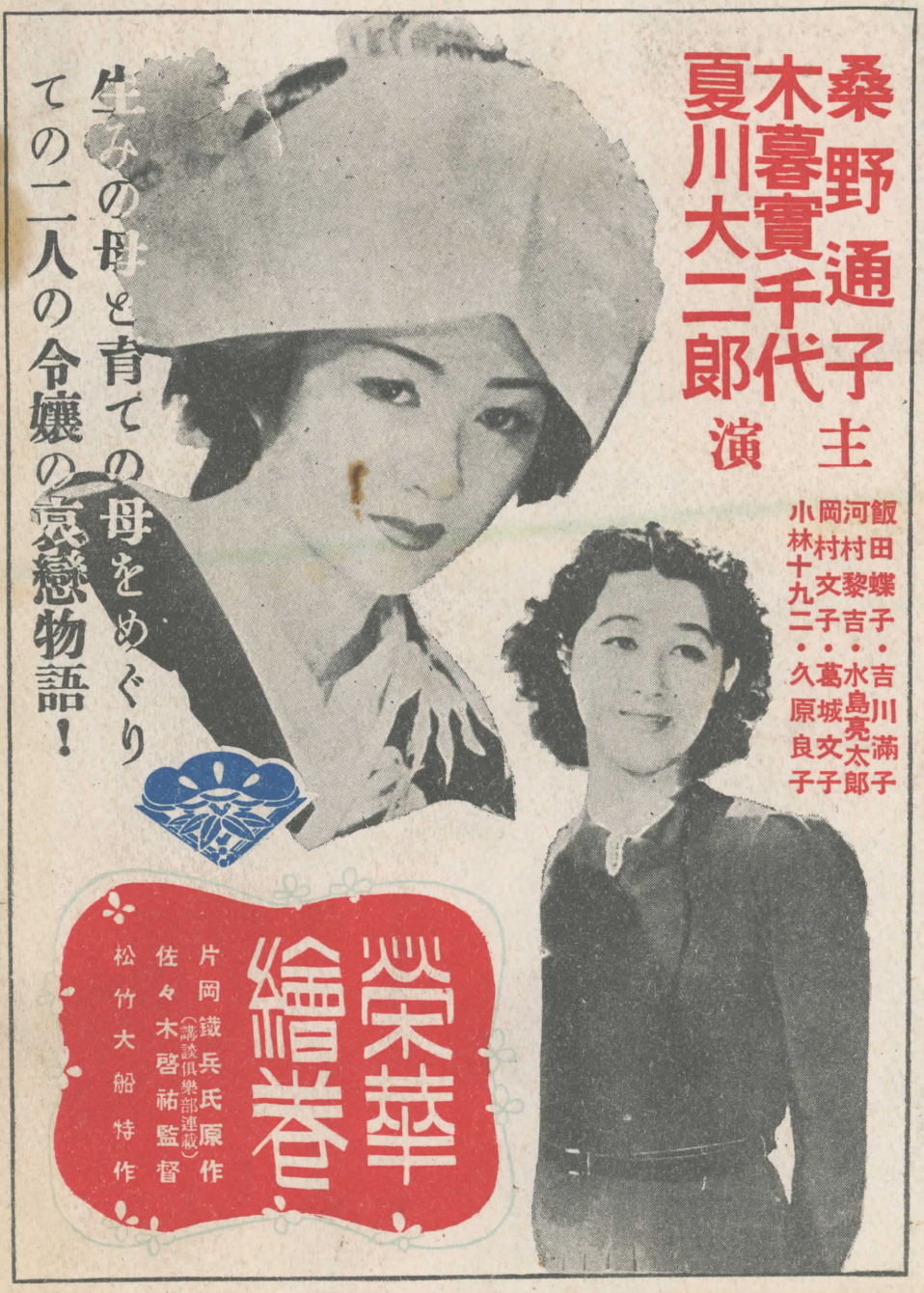
松坂屋はナゼ安い？

❶會社の内容が頗る堅實である
❷現金仕入制度である
❸傍系會社や專屬工場で自家製造
❹全國主要都市に大營業所を有す
❺薄利多賣主義である
❻營業方針が地味で無駄がない

松坂屋
大阪 日本橋

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十四年六月十日印刷（毎月一回）

「道頓堀」 第十四年 第百五十一號



壹部定價金參拾錢